

地元学から学ぶ

— 講演会記録集 —

地元学から学ぶ

講演会記録集



日時

2010年1月31日(日)
13:00～19:00

場所

立教大学池袋キャンパス
太刀川記念館3階多目的ホール

主催

立教大学ESD研究センター

2010年3月 立教大学ESD研究センター

2010年3月
立教大学ESD研究センター

ESD R C
Education for Sustainable Development Research Center
Rikkyo University

『地元学から学ぶ』講演会記録集

目次

| | |
|---------|----|
| はじめに | 3 |
| 地元学から学ぶ | 6 |
| 結城 登美雄 | 7 |
| 河野 和義 | 21 |
| 吉本 哲郎 | 43 |
| 座談会 | 57 |
| 参加者の声 | 63 |
| ESDへの期待 | 65 |
| 講演会を終えて | 67 |



はじめに

阿部治（立教大学ESD研究センターセンター長）

ESDとは、「持続可能な開発のための教育」であり「Education for Sustainable Development」の英語の略になります。この他に、「持続可能な社会のための教育」や「持続発展教育」とも置き換えることもできます。

人類にとって緊急かつ最重要な課題である持続可能な社会を創造していくためには、環境的持続性はもちろんのこと、社会的公平や公正、あるいは平和や人権などの社会的持続性、さらには持続的な経済活動、これら3つが統合されて、持続可能な社会を作っていくと考えられています。そして、この3つの視点で、地域に住んでいる人たちが主体的に持続可能な社会の未来、あるいはビジョンを描き、その実現のために政治に参画し、当事者意識を持って行動していくことが必要となります。すなわち、このような人間を育てていく、それがまさにESDなのです。

2002年の国連持続可能な開発会議（ヨハネスブルグサミット）で日本政府とNGOが「国連の10年（国連持続可能な開発のための教育の10年）」を提言しました。2005年から始まった、この教育の10年は、「持続可能な開発」の考え方を教育や学習の中心に組み込むことを意図したものであり、幼児教育から、大学などの高等教育に至るまでの公教育や社会教育、企業内教育の中に制度化していくことが求められています。すでに国内においても、政府や自治体、企業、

NGOなどによる様々な取り組みが学校や地域で行われています。

この教育の10年を契機に設立した立教大学ESD研究センターは、日本だけではなく、アジア太平洋地域をも含めて、さらには学校教育だけではなく、地域での取り組みから、企業活動までも含め、ESDを具体化していくための研究に努めております。この活動の一環として本日の「地元学から学ぶ」を開催することになりました。

「国連の10年」が始まってから、様々な方が様々な形でESDを始めています。しかし、ESDが我が国に紹介される前から、日本の各地で、自分たちの地域の自然や歴史、文化、産業など、つまり、地域の資源をベースにした地域に適した地域づくりが行われてきています。それは地場産業の振興や福祉なども包含した、まさに内発的発展に立ったまちづくり、地域づくりということが可能です。

このような地域づくりの手法として、地元学は非常に有効に機能してきました。私自身も、水俣での地元学に触れる中で、その魅力に取り憑かれました。地元学を通じて、地域の人たち、それは大人だけではなく、子どもたちも含め、元気になっていく様子が、あちこちで見受けられるようになりました。地元学は、地域における自然（あるいは、自然と人とが織りなす風土）をベースとした人と人との相互の学びあいであり、地域における自らの存在意義を確認するプロセスともいうことができます。





このように、地域を環境、社会（文化を含む）、経済の統合の場として捉え、自らとの関係を明らかにする地元学は、地域の人々を励まし、当事者として、持続可能な地域づくりに向かわせています。すなわち、地域から学び、人と人とが相互に学びあう地元学は、非常に優れたESDの手法の一つといえます。このことは、地元学の先達である結城登美雄氏、河野和義氏、吉本哲郎氏の活動の中で明らかになってきたことでもあります。現在、日本だけではなく海外でも地元学は注目されています。吉本氏によれば、ブラジルにおいても受け入れられたようです。そして今、ブラジルに留まらず、世界各地で地元学が広がりつつあります。

このような背景から、ESDと地元学の繋がりを、この3名の話から考えていきたいと思えます。ただし、このような狙いはありますが、3名には、このような視点・枠組みで話して欲しいとは敢えて伝えておりません。それは、ご自身が関わってきたこと、動機を含めて、広く私たちに伝えて欲しいからです。そこから何を学ぶかは、皆さん次第です。

地元学から学ぶ

結城登美雄

河野和義

吉本哲郎

『ESD（持続可能な開発のための教育）』は、持続可能な社会の構築に寄与する人づくりであり、多くの手法や場があります。ESDで特に、留意すべきことは、国際的な視点を持ちながら、個々の地域に応じた持続可能な社会づくりを行っていくことです。この点で今最も注目されているのが、「地元学」です。今や地元学は日本発の地域づくりの手法として国際的にも取り組まれています。本講演会では、地元学の提唱者・実践者である3名が初めて一堂に会して、地元学の何たるかを縦横無尽に語っていただきました。

結城登美雄

【民俗研究家。1945年山形県生まれ。宮城県在住。】



主な経歴

山形大学卒業後、広告デザイン業界に入る。(有)タス・デザイン室取締役。宮城教育大学非常勤講師。宮城県宮崎町「食の文化祭」・14年度宮城県北上町での「みやぎ食育の里づくり」アドバイザー、地元学に取り組んでいる。2004年芸術選奨文部科学大臣賞受賞(芸術振興部門)。

はじめに

〈地元学〉という言葉は、地元の方々の言う「おらほのこと」という意味で、〈地域学〉というクールな認識よりもっと身近に感じるように呼び始めた言葉です。私は、この15〜16年、主に東北の農山村漁村の集落を訪ねて歩いて、〈地元学〉というものについて学んできました。それぞれの地元の方から、その土地がどのようにしてできたのか、その土地をどのようにしていきたいのかということ聞き、学ばせてもらったことをお話ししたいと思います。

初期段階の〈地元学〉

私は、大正7年築造の登り窯のお宅を訪ねました。日常のどんぶりや茶碗、火鉢、そして最後にお世話になる骨壺まで作っていた焼き物のまち、仙台の最後の登り窯です。都市計画道路が30数年前に決まり、20年間ずっと立ち退きを言われ続けたご主人は、それでも窯を壊せず、小屋の上を集めた堤焼きを残しているのです。このようなご主人の心根に、強く感じるものがあります。それが、私自身〈地元学〉というものを考える一番の土台になったと思っています。

都市というのは、なかなか言葉を交わすチャンスがビジネス以外にありません。そこで、仲間と歩いて回り、いろいろメモをしたことを小さな冊子にまとめました。岩切、福田町、小鶴、生田、堤町、七郷など40種類の冊子を作って配ったのです。すると、わずか100メートル程の小さな通りしかない、世帯数300のまちに、2000〜3000部が売れ、さらには、アメリカからも注文が入ったのです。どんな小さな通りであれ地区であれば、そこには歴史があり、人の交流があります。それが300世帯のまちで3000部も売れる背景なのです。そして、人の繋がりというのは、距離や時間を超えるのだなと思いました。地元を懐かしいと思い、そのことを語り合う場として必要とされる、対話を繰り返すものとしてのメディアを作ることが、私の初期段階の〈地元学〉なのです。



大漁旗に見る思い、そして始まりはいつも個人の営み

1988年、宮城県唐桑半島にあるまちと出会いました。遠洋マグロ船の乗組員日本一という地区です。かつて2000人が漁業に関わっていましたが、今では500人を割っています。漁が半年から一年になり、一年半になって長期操業になると、150キロメートルのはえ縄をやっても、昔は30匹捕れたマグロが、今では一匹も捕れなくなりました。大漁旗が掲げられることもなく、作業がどんどん萎んでいくのを、切なく見送らざるを得ないのです。この大漁旗に託す思いを、当初の私は考えませんでした。

ある時、小さな村を歩いていると、かつおぶし工場がありました。使われずに30年ほど放置されていた工場です。ここを何かに使えないだろうかと思いついたところ、賛同してくれる人が集まりました。地元の小学生も手伝ってくれ、まずは掃除をするところから始めました。すると少し空間ができます。そこで、かつて遠洋漁業の船乗りだったという家の大漁旗を皆で集めてきて、ミシンで一枚一枚縫い繋いだのです。それと同時に、竹藪の多いこのまちの竹を切り、かつおぶし工場を竹のやぐらで囲いました。そ

ないものも、それが集まって実は、地域というものが成り立っているのではないのでしょうか。一つひとつの大漁旗が集まってできあがったもの。それを見て、始まりにはいつも、私たち個人がいたのだと、私たち個人の営みがあったのだということ、この村で教えてもらいました。



こに大漁旗を100枚、200枚、300枚と縫い合わせて劇場に仕立て、郷土芸能などの舞台を3日間やったのです。普段は来ない知人も集まり、5〜6年ほど続けました。

この劇場でやる舞台は、地元の村の話です。地元の家々を回って、その家々の話を聞き、この土地をどのように生きてきたか、その家の歴史や喜怒哀楽を舞台の演目に仕上げる。そうして、各々配役を決めて公演するのです。これを、その村の「取材劇」と呼んでいます。こういったことを、「黒テント」という東京の劇団と地元の若者30人で行いました。

そういう地元の話で作った舞台を、600人程の村人が集まって観劇し、誰々の話だと言ってゲラゲラ笑います。そして最後に、「どや節」という大漁唄い込みの原型のような歌を、櫓と權をやりながら歌います。すると、不思議なことに、最後は600人の村人全員が泣くのです。地元の村の物語を思っ、泣きながら歌うのです。若者の演技力を何倍にもカバーする何かが、そこにはあるのでしょう。

それを見て、土地の力、人の力、そこで生きてきた人の心というようなものに出会いました。一つの小さな何でも

村の力、地域の力

宮城県宮崎町という奥羽山脈の麓にあるまちでは、「村にはコンビニがない。今どきこの世の中にコンビニもない自治体なんてあるだろうか」と男が集まれば文句ばかり言います。けれど、そこで暮らすおばさんやおじいさんは、自分なりに耕して、自分の食べ物自分で作って売っています。コンビニもスーパーもいらないまちなのです。食堂は2軒しかありませんが、その2200世帯の家々は、酷い食事をしているわけではありません。軒下を見れば、次の暮らしに備えて準備をしている営みの姿が見えます。

20歳でお嫁に来てから、一銭のお金ももらわずに7万回、食事を作ってきたおばあさんがいます。その労苦に家族は今、いただきますもごちそうさまも言わず、またこんなものかと言います。けれど、黙々とおばあさんは生きています。こういうおばあさんに5人、7人と会うと、おばあさんの思いを感じます。会いに行くと、特別なものは何もないので、皆、家々にあるものを持ってきてお茶を飲みます。当たり前のおいしい食事をいただきます。この力も大したものだと思います。



ある時、私は「宮城県が国体をやるために田んぼを潰して作った大きな体育館が、一度使ったきりで、この半年誰も使っていない。おばあさんたちの普段の食事で、ご主人が夕べ遅く帰って来て食べなかつた冷蔵庫の残りものを、持ってきてくれませんか」と提案しました。始めは恥ずかしがって渋っていましたが、何とか集まってもらいました。

こうして集まったおかずは、家々によくあるおかずです。「ギョウザ」や「ニンジン炒め」など普段の家庭の味を持って来てくれます。隣人の影響もあってか、2200世帯のうち800世帯が集まってくれました。800世帯分並ぶと、それまで文句ばかり言っていた男たちが、この風景を見て感心したのです。すると、持ってきた女性たちが、私たちの変化に驚きます。そういう経験が大切なのです。

2年目からは、1300世帯分が集まりました。ある若いお嫁さんが遠慮がちに、「ハンバーグは駄目ですか」と言ってきました。それを、おばあさんたちは、「ハンバーグは宮崎町の食文化ではない」と言うのです。なぜハンバーグを出したのかと聞くと、「私は嫁に来てから、お姑さん、

お舅さんに教えられて、ようやく畑で野菜が作れるようになりました。上手ではないけれど、何とか作れるようになりました。けれど、うちの主人は、野菜が嫌いなのです。それが子どもに移って、土曜日になるとファミリーレストランに皆で行ってしまいます。帰ってくると、やっぱりこのハンバーグはおいしいと言うのです。悔しいと思って、自分が採った野菜を細かく刻んでハンバーグを作り、それをある日夕食に出しました。そうしたら、ファミリーレストランのよりおいしいと言ってくれました。それで、胸がスツとしたのです」と言います。その話を聞いた周りのおばあさんたちが、「それなら出そう」となるのです。そういうものがいっぱい集まります。これはこうだという意見が、どんどん始まります。

このように、食べ物に挟むと、よその人間や知らない人間であろうと、妙に盛り上がりします。家族も食を間に挟む関係です。地域や人間における人の繋がりに、食べ物に果たす役割はあるのだなということを教えてもらいました。そうして、食生活改善や伝統食復活ということが始まるのです。

3年目は、お金を一銭もかけませんでした。役場が出してくれた100万円で、28種類1万食を作ると、行列ができました。ただ食べさせるだけではもったいないので、200円〜300円ほど取るようにしました。それでも、1時間待つほどの行列ができました。こうして始めは何もないと言っていた宮城県の集落に、1万の人が集まるようになったのです。

役場の職員は休耕田を駐車場にし、農家の人々は家にむしを敷きました。簡単な地図を配り、来た人皆が田植えの終わった稲を見て、癒やされたと言っています。地元のおじいさんは、どぶろくを出したり、喉が乾いた人のために、氷付きのキュウリやトマトを1個50円で出したりします。そうして、村に来た人たちとの付き合いが増えていくのです。

役人の方たちは、子どものために体験学習に使いたいと言ってきました。たくさんは無理なので、車やバス1台を相手にお付き合いします。例えば、ゴボウ掘りの体験をさせるために、村のおじいさんは子どもたち一人ひとりにそれぞれ教えます。周りには手を出させません。始めはうまく掘れなくて泣いていた子どもも、1本掘れるようになります。

にっこり笑うのです。これを「体験」というのです。

またある時は、誰も見に行かず倉庫になっている歴史民俗資料館を掃除して、食べ物屋をやろうと提案しました。

水道も何もない所なので、各自が持ち込みで始めました。

そうして作ったメニューが、お餅3種類（お雑煮、納豆、あんこ餅）、和え物、酢の物、煮物、煮魚、どぶろくです。今度は値段で採めました。2000円にしたい私と、

500円にしたいお母さんたちとの間に1500円の開きがありました。最終的には1000円に落ち着きました。

そして当日、行列が300人並びました。こんなに人が来るとは思っていなかったようで、お母さんたちは100人分しか準備していませんでした。それが5分で売り切れなのです。そこに何か、自分たちの持っているものと、値打ちとの間でギャップがあり、5分で売り切れた途端に2000円にすれば良かったということになったのです。

こういったところも（地元学）の課題でしょう。

軒下には日々に備えて、仕事をする人の営みの形があちこちに伺えます。大げさに言えばそこが手掛かりです。20歳から90歳まで7万回の食事を用意してきたおばあさん。

では、家族とは何でしょうか。ファミリーという言葉は、ラテン語のファミリアを語源として発生したといえます。そして、ファーマーというもう一つの語源もあるといえます。ファミリアとファーマーは、同じお母さんから生まれた兄弟であったということです。私たちの人類史を振り返ると、家族とは一緒に耕し、一緒に食べる者たちの歴史ではなかったかと思えます。最近では、東京と東北が無限に離れたように、作る人と食べる人の距離が離れて、相互に理解ができないほどにまで広がっています。しかし、つい1970年ぐらいまでは、私たちの多くの地域の暮らしは、一緒に耕し、一緒に食べる者たちであったと思うのです。そうして日本に村が生まれました。日本に村が生まれた一番の理由は、やはり水田稲作と大変大きく関係があります。特に東北の場合は、冬を越えるための食料が手に入った時に、村が生まれてきました。その最大のものが米であったと私は理解しています。

私は、7万回の食事を作り続ける90歳のおばあさんが持つ力というのを知りたいのです。なぜ小さな村は、何百年も村であり続けたのでしょうか。なぜ補助金もない時代

このおばあさんの支えがあったからこそ、家族は崩れず、家族の集まりである地域は、それ以外の仕事に頑張ることができたのだと思います。今日より明日がより良く、そして明日が安定するようという思いで働いている、暮らしている人々がいるということ、そのことの大切さが（地元学）のニーズではないかと思っています。

このように、日々の営みの中にある大切なもの、地域とはいったい何だろうということ、自分自身が思うようになりませんでした。私たちは、「地域振興、地域活性化、地域づくり」と言っていますが、それを考えさせてくれたのは、地元の方たちなのです。

地域とは何でしょうか。わからないからこそ、この地域論や、地域学、地域づくりというのが永遠に続くのです。わかっってしまったら、やらないでしょう。それだけ深いものなのです。私が学んだのは、「地域とは家族の集まりである」ということです。地理学系はエリアと言うでしょう。社会学はコミュニティと言うでしょう。経済学はマーケットと言うはずです。しかし、因数分解できないものとして、「地域とは家族の集まりである」というふうに、私なりに定義をしています。

に、隣村や両隣村を世界としながら、何百年も人の営みが続いたのでしょうか。その力は何なのでしょう。

人は生きていく限り、必ず願いや期待というものをごどこかに持っているはず。それと同時に、人は簡単に願いや期待を実現できるわけではありません。いろいろな現実やぶつかります。だからこそ、齟齬をきたし、悩みや課題を抱え込むということになります。それを解決し、実現するためにはどうすればいいのかということを考えます。私は実現するためには、実現する条件の前に、まず実現したいという気持ちが必要だろうと思っています。

ある悩みを抱えたその個人が、自分自身で悩みを解決することはできるはず。しかし、個人の力をもってしても解決できない、実現できないものがあります。その時は、身近にある家族の力がそれをサポートし、協力していくことによって実現してきました。

しかし、家族でも解決できない悩みが時には出てくるのです。その時に初めて、同じような悩みを抱く人間同士が繋がるのです。それが地域なのです。皆の力で解決し、実現にあたっていくことを私は地域づくりだと考えています。

良い地域の7つの条件

「地域とは家族の集まりである」という定義をもとに、地元の方がどのような悩みや願いを抱いているのかを、800の村3000人に聞き、整理してみました。

よい地域の7つの条件

- ①よい仕事の間があること
- ②よい居住環境があること
- ③よい文化があること
- ④よい学びの間があること
- ⑤よい仲間がいること
- ⑥よい自然風土があること
- ⑦よい行政があること

1つ目は、良い仕事の間があることです。良い自然と風土に働きかけることを労働と言います。それを農業と言ったり、漁業と言ったりします。

2つ目は、良い居住環境があることです。居住環境を整えるために、道路をつくり、橋を架けます。今は行政の仕事として当たり前になっているものを、かつては村人の力でやっていました。

3つ目は、良い文化があることです。村の人たちは、皆で楽しむことという意味で文化という言葉を使っているようです。一年の労働が終わり、冬を迎えられることを、祭りという形で皆で喜ぶ。そういったもので文化が地域から生まれたのです。

4つ目は、良い学びの間があることです。そこに持続可能な文化という問題があります。学びとは、知るための学びではありません。使うための学びです。使うとは生かすということです。生かすための学びというのが良い学びなのです。

5つ目は、良い仲間がいることです。良い仲間というのは、気心が合うだけの関係ではなく、同じ土地を生きる人間として、100点を相手に要求せず、折り合いをつけな

がら付き合っていく仲間です。好きな者同士だけが集まるのではなく、もっと生身の仲間という意味です。

6つ目は、良い自然風土があることです。良い自然とは、山、海、川、田んぼ、畑という具体的なものです。そこに水、風、光、土という4要素の風土が加わります。その中での違いがあり、作物の育つ度合いが変わってきます。自然を壊すなどいうものではありません。水を汚すな、土を殺すな、そのようにして生きてきた人たちがいるのです。7つ目は、良い行政があることです。この意味は皆さんで議論してください。

村の方のたくさんさんの意見をまとめると、このように7つに分類できました。これが、村を歩きながら地元の人々に教えてもらった、私の〈地元学〉です。村の人々は誰もが、自分の住み暮らす所を、良い地域、良い村にしたいと願っています。

諦めない、村の言葉と力

岩手県久慈市山形町大字荷軽部字木藤古という限界集落に、5戸18人の村がありました。今では5戸9人になって

います。25年前、この村の人々は、役場から村を降りなさいと言われたそうです。一度は降りようと決断しましたが、いざとなると悩み、紆余曲折があつて村に残ることにしました。しかし、残ると決断はしたけれど、不安は消えなかつたそうです。そこで、お守りのように言葉を毎日毎日集めて、村の人々皆で紡ぎ出しました。その時の言葉がここ(左写真)に掲げられています。これが私の考える〈地元学〉的な良い村であるための基本です。それを、この村はしっかりと生きてきたのだなと思っています。



この村は、与えられた自然立地を生かし、この地に住むことに誇りを持っています。一人一芸何かを作ります。お金はありませんが、ものは作り出せる、生み出せるのです。5戸18人が5や10の技を持って集まれば、大抵のものは作れます。都会のあとを追い求めず、独自の生活文化を伝統の中から創造し、暮らしているのです。20年前は藪だらけだった場所が、今では緑の芝生に変わっています。5戸9人だった超限界集落が、今では600人が集まるようになりました。

大切なのは、集落の協働と和の精神です。諦めて生きるのではない、生活を高めようとする村の意思や精神です。

昭和4年、柳田國男さんが、「美しい村など初めからあつたわけではない。美しく暮らそうという村人がいて美しい村になるのである」と『都市と農村』という中でおっしゃっています。私は、この20年いつも地域に関わるたびに、前述の村のことも含め、心の中でこの言葉を反芻してきました。美しいとは、単に景観の話ではないのです。美しい村というものは、初めからあつたのではなく、美しく生きようとする村人がいて、村は美しくなったのだという当たり前

差額は、保管料や事務経費など、次の世代の若者がやっていけるための農業支援に使われます。品種は、適地適作ということで、標高420メートルの寒冷地に合う品種を選びました。その品種も、だんだん数を増やしていき、今年で5年目に入ります。そして、今、稲刈り直後に完売するまでになりました。

このプロジェクトは、雪解け水が入る冷たい場所の、平場よりも2割、3割収穫量が少ない11戸の集落から始まりました。条件は、天日でくい掛け、乾燥だけをお願いしました。そして、米とご飯は違うということで、村のお母さんたちに40回、ご飯炊きをお願いしました。そうして、試行錯誤の結果、おいしいお米ができたのです。

すると、国に切り捨てられた人たちが集まって、教えてくれと言ってきました。もちろん、全てを教えました。くず米ができればそれを米粉にして、まちのお菓子屋に渡します。そうして40種類ほどのお菓子が生まれ、団子やパンや漬け物が作られました。これが「鳴子の米プロジェクト」です。シンボルマークには「豊」という文字を使っています。身近に食べ物があることを「豊」と呼び習わす心の表れです。

の心を、私たちは持ちたいと思うのです。

鳴子の米プロジェクト

食べ物を支えている48%は70歳以上の高齢者だということです。この高齢者たちは、もう限界だと言いながら、今年も懸命に田植えをします。しかし、本当に限界が来たら、皆さんの食料はありません。この人たちが日本の食を支えているということです。

鳴子（宮城県大崎市）という所には、620戸の農業者がいますが、そのうちの5戸しか国から応援されています。615戸がもう応援しないとされていて、諦めました。国は切り捨てましたが、切り捨てられてのんびりしてられないのが食べる私たちです。食べる人間たちが集まって、それを支えられないかと思い、始めたのが「鳴子の米プロジェクト」というものです。

プロジェクトの概要としては、生産者価格を1俵1万8000円（現行1万3000円）で農家に保証します。なおかつ、5年間保証をします。消費者には1俵2万4000円で購入してもらいます。この6000円の

私たちの時代は、現金と株券を「豊」と呼んできた時代の末裔です。そろそろ身近に食べ物があることの豊かさを、私たちの幸せとする時代が必要なのではないでしょうか。

鳴子の米プロジェクト概要

- 生産者価格1俵（60kg）18,000円を5年間保証（現行13,000円）
- 消費者価格1俵（60kg）24,000円
- 1俵6,000円の差額は保管料、事務経費や若者の農業支援などに使われる
- 適地適作の品種（東北181号）



最後に

日本人は今、1年間に1人1俵お米を食べる時代だそうです。昔は2俵食べたと言われていました。約1000杯分のご飯になります。「鳴子の米プロジェクト」のお米、1俵2万4000円は高いと言う人がいますが、1杯に換算すると24円です。今農村は、この24円でやっています。この先、12円、11円、10円を割ってしまったら、田んぼはもうやりません。それを5年間暫定的に18円にすることで、何とか5年はやっていけます。そして、やがて24円にしようと思っています。そして30円で買ってもらえるようになった時に、親たちが若い世代に、米を作って頑張れと言えるでしょう。それが私たちの目標です。

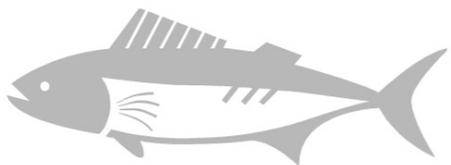
この運動によって、たくさん人が来るようになり、若者が来るようになり、稲刈りや田んぼで人と人が出会い、楽しい場が生まれました。また、中学生たちが応援に来るようになったので、しょうもない授業をするようにもなりませんでした。そこでは、新聞を広げて、「これが君たちの1日分のご飯、3杯分です」と言いました。すると、中学生70人が新聞をじーっと見て、その中の一人が手を合わせ、深々

と頭を下げたのです。それを見て、仲間の中学生も頭を下げました。慌てて大人も頭を下げました。稲刈りや田植えなど、農業について何も知らない田舎の中学生が、「じいちゃんや田んぼをやめた理由がわかった。お父さんがなぜ田んぼをやめたのがわかった。ようやくわかった。でも私は何もできないけれど」と言って手を合わせ、「ありがたいいただきます」と言ったのです。そういう心は、日本人の中から無くなっていないと思います。だからこそ、これを一つの義務にしています。

こういう一般の人以外にも、企業が来るようになりました。仙台の新幹線のコンコースやいろいろな所で、店頭を一手に引き受けている弁当屋です。この会社の社長がテレビを見て、お米を売ってくれと言って来ました。値段は、業界の常識を越えて1俵1万4000円で買うと言います。私は、無理ですと言いました。私も1万8000円払っているのです。業界のことはわかりませんが、私たちが世界ではできません。交渉は破談し、もう来ないと思っていたらまたやって来ました。今度は、1万8000円で4トン買うと言います。私の心は少し動きましたが、これ

をやってしまったら農協と同じになると思い踏み止まりました。さすがにもう来ないと諦めていたら、その社長がまた来て、「本来に2万4000円で買えば農業は良くなりますか？」と聞きます。私は「日本の農業はわからないけれど、鳴子のこの集落の農業は、きつと前を向いていけるようになります」と答えました。そうして、皆と同じように1俵2万4000円で4トン買ってくれるようになりました。これが1年目の出来事です。去年は8トン買ってくれました。ただ、1杯14円で済まそうというのを、24円にしたというだけです。いつまでも企業の売上ばかりを考えず、農家のことも思ってくださいということです。農家がいなくなつては、弁当屋は成り立たないのです。

本末のことを私たちはしっかりとやらなければいけません。それが〈地元学〉ではないかと私は思うのです。



河野和義

【株】八木澤商店 代表取締役社長。1944年岩手県生まれ。岩手県在住。】

主な経歴

生家は文化4年（1807年）から醸造業を営む老舗「八木澤商店」。立教大学法学部卒業後、家業の味噌・醤油醸造業に従事。1984年、陸前高田青年会議所理事長在任中に「大学合宿誘致運動」を展開し、1986年から「陸前高田ふるさと味の会」会長として、地場産品の販路拡大に努めた。さらに、1989年からは、「全国太鼓フェスティバル」を開催する実行委員会会長（現在は実行委員会顧問）を務めるなど、地域づくり、地域活性化に取り組んでいる。なお、「八木澤商店」の主力商品である「ヤマセン特級こいくちしょうゆ」が2009年10月、第37回全国しょうゆ品評会（日本しょうゆ協会主催）で最高位の農林水産大臣賞に輝いた。同賞の受賞は3度目。



はじめに

岩手の陸前高田という所から参りました。岩手三陸海岸の一番端っこ、隣が宮城県の気仙沼、目の前が海です。私は教授ではありませんが、時々、岩手大学の農学部で子どもたちに、醤油の本物って何なんだ？ という話をしていきます。

私は立教大学の卒業生です。1964年、世の中が東京オリンピックでワイワイしていた時、大学2年生でした。その時代に日本の片隅で大変な思いをして、大変な生活をしていた方々があります。それが吉本さんの出身地の水俣です。1995年に私は国から表彰されまして、その代わりに賞状をあげるから水俣まで来いと言われて、水俣に行ったら吉本さんと知り合いました。そこで初めて地元学という言葉を知りました。

「俺は20年ぐらい前からこんなことやっているよ」と、
縷々地域の仲間といろいろやっていることや、自分の商売のことを吉本さんに話したら、「あんととつくの昔に地元でやっているじゃん」と言われました。その時は何が何だかわかりませんでした。私は、しばらく自分のまちから離

朝市のおばあちゃんに気付かされた「豊かさ」

陸前高田は、岩手県13市ある中で、統計学的には、数字の上では一番貧乏なまちです。なぜか？ 誘致企業がほとんど無いからです。漁業では隣町の大船渡と気仙沼は全国的に有名ですが、陸前高田はあまり有名ではないのです。

今、立教大学の学生たちが実習でお世話になっている陸前高田の生出（おいで）という集落、そこは今もって皆で助け合って、まるで一つの家族のように暮らしている、陸前高田のまちから車で30分ぐらい離れている集落なのですが、まちの子どもが悪いことをしますと「生出の山奥に連れて行って捨ててしまおうぞ」という、そういう集落です。

立教の学生たちが来て5泊6日していくのですが、たった5泊なのに、帰る時は地域の人も学生もボロボロ泣いて別れています。何なんだろうなと思いましたら、「本物の

人間に出会った気がする」と学生が言うのですね。地域の生出の人たちは「まるで孫が帰って来たみたい」と。

陸前高田では、5の付く日に朝市がありまして、その朝市で「俺の住んでいるこの土地って豊かなんだ」と思わされたことがあります。生出集落のおばあちゃんが、ある時松茸を持って朝市に出ていました。私の顔を見て、私も生出集落が好きでしょっちゅう行っていますから、「社長、私は昔はね、自分で醤油も味噌も自宅で作った。今は作らないで、あんたんちのものを買ってるよ。おら、あんたのお客さんだ。だから私の松茸買ってちょうだい」と言われました。値段を見て「ばあちゃん結構高いぞ、これ」と言うと「何言ってるんだい、松茸なんて安くするもんじゃない。安くしたら韓国産と中国産に間違われるじゃない」と、こう言われました。「でもこの高さじゃ売れ残るぜ」と返すと「いいんだ、売れ残ったらあげるから」と言いますから、「ほんなら俺にくれ」と言うと「あげる人が決まってるんだ」と。朝市ですから、海の人も出ています。「あの人にあげるんだい。あの人にあげると、11月になるとうちの山奥にアワビが届くんだ」と言われました。わかります？ お金が一

昔ながらの製法・素材で「本当」の醤油を作る

醤油は、大豆と小麦と塩で作るのが本当の醤油です。これは(左写真)我が社のパンフレットなのですが、たった一粒の丸大豆が表面にあります。この丸大豆から味噌も醤油もいろいろなものができますよ、という意味でパンフレットにも掲載しています。



戦後、アメリカから脱脂大豆、つまり大豆の油を絞った大豆が入ってきたのですね。ところが、アメリカでは大豆は植物油を絞るためだけの穀物なのです。絞って余った部分は牛の餌にしていたのですが、十分タンパク質が残っていま

つも動いてないんですよ。でも良い人間関係がありますから、そのおばあちゃんが何て言ったでしょうか？ 「松茸、舞茸、山菜、あるいはウニ、アワビ、ホタテ、ワカメとか東京だと高い銭出さねえと食えねえものが、おら、生出の山奥にいて、一銭も金払わなくても手に入りますよ。高田って豊かだよ」と言われました。そのおばあちゃんに教わったのです。私の家も考えてみたら、海産物のおいしいものほど、アワビとか、いくらで買って来たという話がないのです。どこからももらったのだと言います。食べ物が豊かな所は、少々お金がなくても、実はすごい豊かだということに気付かされたのです。



すから、日本に押し付けろといって押し付けられたのです。

現在の日本の醤油は、90%が脱脂大豆醤油で、せいぜい半年以内にできます。丸大豆で作ると最低1年、良いものは2年かかります。私は、どうせ作るのなら同じ国内でも岩手県、しかも地元の大豆にこだわってやれということで、今から27、28年前に挑戦をしました。私が大学を卒業して帰った40年前頃には、いかに簡便で安く作るかという時代でした。

安売り競争の真只中に、長男坊だからって帰って行ったわけです。このままだとうちは潰れるな、どうしたらいいだろうと思いました。私が生産者の頃を作っていた醤油の作りとは全然違っていたのです。昔の作りに戻そう、丸大豆で作ろう、そういう決心をして作り始めました。

醤油作りから始まる「自立」

要するに、地元学とはどう自立するかなのですが、自立は一人できません。「自立」という言葉はイコール「依存」なのです。依存というのは、良い意味での依存です。助け合うという、信頼を持って依存しながら何かをやるという

ところで、初めて自立というのが生まれてくるような気がします。

私は、この昔の醤油を復活させて大儲けを企んだのではないのです。私の代でこの昔の作りをやらなかったら、私の次の代、その次の代に残りません。当時の工場長は「こんなものを作ったって、天文学的な値段になってしまいうから、だから誰も買わないよ」と言いますから、私は「売るために作るんじゃない。そうじゃなくて、我が八木澤家の伝統として作りだけを残したい」と答えました。

もう一つ、地元の大豆やその小麦を使って30000円の醤油を作った時、一番最初に笑ったのは同業者です。「あんた、気狂ったの?」と。その時四つの大事な事があると言いました。「一つ目は地元、2つ目は本物、そして食べ物を作る人は3つ目に優しくなきゃいけない。てめえだけが儲かりゃ、どんなもの入れたっていいんだなんていうのは優しくない」と言いました。それから散々笑われたものですから、私は、今、自分がやっていることは正しいはずだと思いつつ「プラス思考」を4つ目に加えました。

脱脂大豆でも、本醸造の醤油ならまだいいのです。地方に行くと混合醸造というのがあるのです。麴を作ってそれに塩水を入れてもろみというのを作りますが、そこへ別に化学的に作ったアミノ酸液をぶち込んで、もろみの量を倍にして原価を安くするというのが混合醸造です。もっと酷いのは、むろもろみタンクも持たないで、液体だけ買ってきてグルグルとかき回して作る、混合醤油というのがあります。酷いものです。醸造発酵過程が一つもありません。3日でできる混合醤油と、2年かけた30000円の醤油と価格を比べること自体間違っていますよね。

確かに、私が自分で逆算して30000円になった時、うわっと思つて、父親に「あのさ、少し作ったあの丸大豆醤油、2年物さ、30000円ついちゃった」と言ったのです。そうしたら父親が「おお、そうかい。今、男の散髪料いくらしてる?」と言います。何で散髪料を聞くのかなと思いましたが。昭和59年当時、25000円から30000円でした。「じゃあ、おまえまともなことしたんだ」と言われました。「何で?」と聞くと父親は、「今、日本の醤油は、90%以上外国の脱脂大豆で作ってんだろ。いかに安く早く作るかっ

30000円の醤油がまともなのである

かつて、私は本物志向、本物志向と口癖のように言っていて、農業もろくに知らないくせに、農薬さえ抜けば無農薬だと思っていました。添加物さえ除けば、無添加だと思っていました。やっていくうちにとんでもない違いがわかってきました。

まず、無添加の説明をします。添加物が入らなければ無添加。確かに無添加ですが、おいしくするために本物のだしを使わなければいけない。化学調味料などを使わないで。脱脂大豆の醤油は発酵期間が短いですから、カラメルで色を付けて、化学調味料を入れる。下手をすると人工甘味料を入れて甘くします。甘いイコールおいしいと思ってるのです。醤油は本来、主役になってはいけないのです。本物の醤油、良い醤油はちよんとつけて、その主役の刺身を、あるいは豆腐を、お餅をおいしく食う、それが醤油の本来の力です。ですから、力のない醤油は人工甘味料でごまかして、それで全部同じ味にしてしまう。醤油が主役になってしまふ、そんな食文化が残っているところがあります。わざわざ日本の食文化を捨てているのです。

ということやっているだろ。昔は、地元の農家さんを大事にして、地元の農家さんに行つて、いい大豆、小麦を選ばせていただいて、農家さんと話し合いをして、農家さんも納得する値段をちゃんと払つて、そしてうちで作つて地元の人に食べていただくという正三角形があつたんだ。その正三角形の時代の醤油一升は、男の散髪料と一緒に値段、同じだったのよ」と言いました。この話を知っている方はいますか? ほとんど誰も知らないのです。それがまともなのです。だから私は、自分で30000円の日本一高い醤油を作つたと思いましたが、一番まともなことをしたと思つています。

添加物は食品の化粧品

発酵食とは何か?
醤油、味噌、酢、みりん、
納豆、塩辛、漬物、キムチ、



珍味、甘酒、魚醬。これ、全て発酵食品です。添加物を一切入れないで、ちゃんとまともな時間をかけた発酵食品は全て健康食品です。ところが、今はほとんどが添加物だらけです。健康食品から自ら遠退いています。それはなぜでしょうか？ 値段を安く作りたいためです。乳酸発酵しないキムチがあるのですよ。パプリカで色を付けて。赤くて辛かったらキムチだと思っている人がいますから。

「添加物って何？」って、岩手大学の農学部 학생に聞かれたのです。「先生、一言で添加物って何ですか？」と聞かれたので、「うん、食品の化粧品だと思え。着色料、保存料、化学調味料、人工甘味料、本来いらぬもの」と答えました。今の食べ物は厚化粧過ぎます。

化粧を落としたら元の食い物は何だったんだ？ そういうものが横行しているのです。なぜでしょうか？ 消費者が安いもの、安いものと求めるからです。もうそろそろ、まともなものを、まともな値段で食べることにしましょうよ。農家の価格保証？ 馬鹿なことを言ってるんじゃない。農家の価格保証だって、使うのは税金ですよ。それよりは、今ここに集まっている人たちが核になって、日本の野菜・

私は、その捨てられた規格外のキュウリで古漬けを作ろうと言いました。古漬けのことなど何も知りません。それで、うちの社員に「古漬け作りの名人ばあちゃんを何人か探してくれ、そこに聞きに行くから」と頼みました。3人見つけてきてくれて、そのおばあちゃんのノウハウで作ってみました。ただ、無添加だったのです。色は悪い、早く悪くなる。でも食べ物はそのあたり前なのです。

農家に「おじさん、ほんでは捨てられたキュウリ持ってきて」と言ったら、「最初は少なくていいな」と、5トン持ってきました。もはや醤油を作っている蔵で作るわけにはいきません。漬物の発酵の微生物と醤油の微生物は違いますからね。そこで近所の農家の納屋を借りて、納屋産業というのを始めました。2年目が13トン、3年目が23トン、4年目が30トン。30トンになった時、塩蔵のキュウリがブクブク泡を吹いて腐ってきたのですよ。何が起きたかわからないのです。その年からキュウリの品種が変わりました(カボチャに接ぎ木したもので、皮がカボチャの性質で塩が真ん中まで入り込む前に腐ってきたもの)。

本物のキュウリは、折って再びくっつくのでいくら振っ

果物を最低でも2割から3割高く買う運動をしてください。米は倍の値段で買おうという運動をしてください。そうしたら農家は辞めていきませんから。農家の価格保証は下手法を出し方をすると墮落農家を作るだけで、ますます農家が駄目になります。保証金目当ての農家が出てきて、おいしい、安全なものを作ろうなんてことを考えないのです。

無添加キュウリの古漬け作り

私は、1982年にもう一つ挑戦したことがあります。ある時、地元のキュウリ作りのおじさんから「俺の作るキュウリは何センチの太さで、何センチの長さじゃないと、しかも真つすぐじゃないと値段が付かない。規格外、太すぎる、細すぎる、曲がっている、全部ほとんどタダ。お前は味噌・醤油屋なんだからこれに付加価値を付けて漬物にしてくれ」と言われました。はじめはできませんと断ったのです。しかし、私には変な性格がありまして、豚もおだてりや木に登るといふのがあるでしょう。おだてられたのです。「おめえだったらやると思ってたんだがなあ」と言われて「やりましょうか」と言っていました。

でも落ちません。本物のキュウリは、自分の根で育ち、イガイガがあつて白い粉を吹くのです。ところが、都会の人はこの白い粉を勝手に農薬だと思ひ込むのです。

4年前からは、ちよつと広大な面積で味噌・醤油の原料の大豆も作り始めました。地元の農家の皆に笑われる場所で。宮沢賢治ゆかりの種山ヶ原という山の上です。あんな所でできるわけないからやめると言われました。銀行にも赤字部門はさつさとやめると言われました。赤字なので。でも続けるのは何ですか。「男のロマン」です。「女の不満」と女房に言われますが、ロマンなのです。赤字だからやめようというのは簡単ですよ。

キュウリの話で、ブラックユーモアがあります。皆が接ぎ木のキュウリに切り替わっていった時に、その接ぎ木のキュウリの農家に行つて「おじさん、昔の自根キュウリ作つてや。どうなの？」と言つたら、「いや、接ぎ木のほうが3割多く採れる」と。「味は？」と言つたら、「そりゃ、おめえ、昔のキュウリのほうがはるかにうまい。見てみな、俺んちで食うキュウリは昔のキュウリだ」と。わかりますか？ これは本当にあつた話です。

量が採れて収入さえあれば、おいしいものを作ろうなんて気が起きない、プライドのない農家が結構出てきています。今、田んぼで大豆を作らせている農家には国が補助金を出しています。畑で大豆を作る農家には補助金が出ません。大豆って本来は、畑で作るものです。減反の田んぼがみつともないですから、何とかしろと言われて田んぼで無理やり作らせています。これが現実ですからね。

要するに、常に農業者が国の政策の尻拭いばかりさせられているのですよ。

美味しいきゅうりをどうぞ

八木澤農園のきゅうりが美味しいわけは…

旬の期間…(7月末～9月中)の農産物
使用している肥料 無化学肥料
※ 塩漬土、緑肥(大豆を種まきさせたもの)
ライフヒーンズ(大豆を乾燥させたもの)
海水を種めた水 露地かす 土壌がらの粉

減農薬に挑戦
炭を畑に入れる 重曹 木酢液で殺菌
除草剤は使用せず、雑草、葉でマルチ
自家製きゅうり(種まきのブルームきゅうり)
かぼちゃの畑を台木に接ぎ木をする市販の
きゅうりと違い、自分の畑で育ったきゅうり
野菜…4～5くらい 市販のきゅうりは3以下

おいしい食べかた

- 水水に10分間くらいつけて、八木澤農園産の醤油のしろみ、又は味噌をつけてかきつく。
- 塩漬を煮立たせて、きゅうりにかけて煮石をする(美味しい!農物の出来上がり)。
- 手羽にして中華風サラダ、弁当サラダに。
- 鶏肉の雑炊にして、フライングで鶏皮、ドレッシングをかけて食べる。
- 粒切りにして、ゴマ油で中華風炒め物に(肉、他の野菜と一緒にでも可)。
- 6口切にして、きゅうりもみ等の惣菜に。

野菜・果物用野菜保持袋をついています。野菜、果物が発生する酸化促進ホルモン・エチレンガスを吸着除去させて鮮度を保つポリエチレン袋です。捨てずに野菜保存にお使いください。

株式会社八木澤農園

金を使ってできたのが中尊寺の金色堂です。藤原三代の時代は、大なり小なり金山というのが28カ所あったそうです。非常に豊かだったんですね。ですから京都は藤原文化をすごく恐れたのです。岩手はその昔、京都に負けないぐらいの文化が本当はあったのです。ですが、京都人と岩手人は口の上さが違います。下手くそだったのです。岩手人は寡黙でむつむつと働きますから。

皆で作った「陸前高田太鼓フェスティバル」

実は、喧嘩七夕祭りという荒祭が警察からストップされました。あまりにも危険過ぎるからです。では、せめて、あの山車の上で打つ太鼓だけでも保存しましょう。いろいろな所や、いろいろなイベントに呼ばれて行きました。そうして、そのまちの太鼓と友達になっていきます。

1988年、誘致企業も来ない中、何かやろうよと声が上がりました。普段から我がまちは保守的なまちで、若いくせに、馬鹿なくせに、よそから来たくせに、女のくせに、年寄りのくせにと言われがちな人が多い所なのですが、そういう所というのは、絶対に良い考え方が出てこないの

陸前高田伝統の祭り

太鼓の話もしたいと思います。陸前高田は900年の伝統の本物のお祭りの残っているまちです。伊達藩の直轄領ですから、ものすごいお祭りです。この保存会の会長をやらされているのです。曜日に関係なく、8月7日に行われるお祭りです。

地元を離れた子どもたちが、盆、正月よりも、この日には必ず帰ってきます。なぜか? 本物のお祭りだからです。観光客も見なければ見なさい、引っ張りたければ引っ張りなさい。自由に参加していただいています。昔は地元の人間しか参加できませんでした。今は人口が減ってしまっていて、そういう人たちにも助けを得ないと祭りになりません。盆、正月より、この8月7日が、私たちの地域が一番人口が増える時です。

一般のお祭りは神社仏閣から出るでしょう。でも、喧嘩七夕祭りは神社仏閣に全く関係ありません。伊達藩の直轄領だったので一揆など起きないよう住民のガス抜きという説で、木で作った戦車のような山車をぶつけ合う激しいお祭りです。佐渡金山が発見されるまで、伊達藩の直轄領である我がまちは日本一の金山がありました。その金山の

す。しかし、そういう連中や、役場の中で出世をとつくの昔に諦めて公務員をやっている人たちが本当の力になります。「失敗したら俺が責任を持つから、おまえたちは好きなようにやってみろ」という中間管理職の人たちがいる、そういう市役所だといいますが、現実とは違っています。

当時、イベントといいますが、すぐ市役所の人間は「地域興しのためにやるイベント」と言いましたが、そんなことではなく、太鼓をネタにして何かイベントをやるうというのが本当の動機です。海のそばですから、天気さえ良ければ夏は黙っていても観光客や海水浴客が来ます。この頃はゴールデンウィークも人が来るようになりました。けれど、秋と冬は閑古鳥なのです。一日でいいからお客さんで溢れさせるようなことをやろう、最初に面白おかしくしようと集まったのが、普段からあまり良く言われない5種(前述)の代表のような人たちと、前述の役所の公務員が集まりました。私は、「陸前高田株式会社太鼓フェスティバル」という本物の商品を作ったのです。地域興しとかを考えなくてもいいんです。でも本物のイベントといっても、何が本物かは誰にもわかりません。

当時、地域興しのためにやろうとするイベントというのは、いろいろな団体の長宛てに委嘱状を出します。「こういうことをやりたいので、あなたの団体から5名出してください、10名出してください」と人を募って、組織を作ります。そうして、代表者が立って、官民一体の組織ができます。本当は我がまちで一番良い人材を集めているのは役所なのに、良い人材を駄目になっているのも役所です。そういう人たちと、本当は何がしたいのかということ、「地元、本物、優しい、プラス思考」というのをキーワードに始めたのが、このイベントです。

スタッフは一般公募で来る人を拒まず

頼んで実行委員になってもらうのではなく、この指止まれ方式でやりたい人が集まります。この指止まれ方式でも、公務員の人が「これ、役所用語という公募っていうんです。公募をしますと、公募に相応しくない人が応募してきた時、断るのが大変です」と言ってきました。役場の人間というのは、断ることを一生懸命考えるのです。私が「そんなに相応しくない人がいるのかい、うちのまちに」と言いますと、

て言うな。皆で考えよう」と言いました。

2年目でテレビ全国生中継を経験

最初の年はものすごい反響でした。終わった時には、皆、年齢も何も関係なく抱き合いました。私たちは素人でもやってのけたのです。ある時、「河野さん、どんなに馬鹿馬鹿しいアイデアでも聞かいかい」と言うから、私は「聞く」と答えました。その人は「来年はNHKで全国放送してもらおう」と言ったのです。私は「2年目では、そんな無理だ」と言おうと思いましたが、否定するなというのが私の考えですから賛成しました。そして、地元盛岡のNHK支局に行って、「こういう話が出ているのですが」と言ったら、支局の人が「いや、去年ね、地域興しの良い例として取材をしに行きました。皆いい顔していますね。実行委員の皆さん、やりましょう」と賛同してくれました。しかも120分生中継でやりましょうと言うのです。

しかし、そのNHK支局が「1週間前までに実行委員たちは準備をしておいてください。生中継は素人には無理です。だから1週間前からは我々プロにお任せください」と言った

「いる」と言います。知的障がい者、身体障がい者、または何人かいるヤクザのことです。私は、「それは違うだろう、皆人間だろう。もし、自らその人たちがやりたいと言ったら入れてやりなさい」と言いました。

それで始まったのが平成元（1989）年です。ただ、最初の年だけはそういう人は運が良かったのか悪かったのか、入ってきませんでした。2年目から、身体障がいの方が入って来ました。その人が「私は目が見えません。平成元年に太鼓を聴かせていただきました。大変感動いたしました。私で役に立つことがあったら実行委員に入れてください」と言うのです。その人は、5年間実行委員をやりました。その人の職業は、あんまさんです。疲れたら、皆の身体を揉んでくれました。

集まった人たちには、地域興しなんて余計なこと考えなくていい、いかに楽しくやるか、いかに優しくお客様をお呼びするかという実験の場を作りました。だから、「家に帰って鏡の前で、どの笑顔が一番いいか練習してこい」と言ったのです。そうして、皆でやっていく中で、「どんなに馬鹿馬鹿しいアイデアも、絶対に、そんなこと無理だよってです。私は「なら、来なくていい」と言いました。せっかくやりましたよ」と言ったのに、間違ってもらっては困ります。私たちは、NHKに全国放送してもらいたくて平成元年から始めたんじゃない。私たちは素人ながら、舞台監督やタイムキーパーなどいろいろな役付けを作って、皆でやり遂げました。2年目で一番おいしいところをNHKが全部やったら、3年目からは誰も来なくなってしまうのです。

実は、実行委員は毎年解散して、毎年公募をしていました。その時も、「どうしてせっかく作った組織を解散するの」と言われました。私は「これは会社じゃない。いわば半分遊びだ。だから入りやすく、辞めやすくするんだ」と言いました。だから毎年公募するのです。何かのしがらみで入っていかなくてはいけないとか、あいつがいるから嫌だとか、そういうことではないのです。自ら自分の意思で入るといふことに重きをみたのです。

私はNHKと喧嘩をしながら、最終的にNHKのディレクターに、「河野さん、あなたたちに任せたら、生中継何分遅れるかわからないよ」と言われました。私は、なんて生意気なことを言ったんだろうと今でも反省しています。その時、私は

「プロ野球だっていいところで終わるじゃないか。時間通りに終わるのはプロレスぐらいのもんだ」と言ったのです。ところが、私たちができることといったら何でしょうか。太鼓の出し入れをするくらいです。ですから、それを一生懸命練習しました。計算では、平均して2分半以内に引つ込めて出すことができれば、時間通りに終わります。けれど、それは物理的に不可能でした。それを練習しました。結果は、20分か30分遅れるはずだったのが、8秒しか遅れませんでした。NHKから来た50人の生中継のスタッフは、「この中に、学生時代に放送局でアルバイトした人は何人いますか?」と聞きます。そんな人は誰もいません。スタッフたちは「信じられない」と言いましました。物事を自分の価値観でしか言えない、そういう人が多すぎます。素直に褒めて欲しいのです。その2時間の生中継が終わった途端に、皆バタバタ倒れ始めました。スタッフに「河野さん、二度と生中継はやめよう」と言われました。

フェスティバルの発展 優しく人を迎える

1年目から3年目までは、私の独断と偏見で、有名で上手な太鼓を選びました。平成3(1991)年の時に、自分た

かが太鼓で、何が格だ」と言われました。そこで「優しさ」をテーマにして太鼓を選びましょうとなったのです。どのみち、有名な太鼓は5年目に来るのだから、4年目はあんまり有名だ何だというので選ばないで、優しさをテーマにした太鼓を選びましょうよと。

4年目の太鼓には、親子の太鼓、不良少女少女を立ち直らせた太鼓などがありました。その中ですごいのは、耳が一切聞こえない、喋れない人の太鼓を呼んだことです。一切音が聞こえませんが、それでも太鼓を打っています。その太鼓は、全員がろうあ者の「甲州ろうあ太鼓」というのですが、波動を皮膚で聴くのです。耳で聴くのではなく、皮膚で聴くです。

この年は、まちの手話サークルが実行委員に入ってくれました。私たちは、耳が聞こえない人たちへの拍手の練習をしなかったので困りました。そうしたら、演奏後に手話サークルの皆が両手を上にヒラヒラさせて手話での拍手をしました。そこにいた観客も気が付いて、3000人が同じように拍手をしました。もつとすごいのは、甲州ろうあ太鼓の皆にスポットライトが当たっていて、観客が見えな

ちでも資金を作りました。座布団を地元の布団屋に800円で作ってもらって、それを1000円で1000枚売って、100万円の売上になります。人件費は無しですから、粗利イコール純利益です。そうして資金を20万円作っています。補助金ももらいましたが、補助金ばかりをあてにしないで、自分たちで資金まで作ってやるということの喜びとプライド。そういうものを大事にしました。

3年目が終わった時に、「5年目はお金の心配はいらないよ」と言われて、「なぜですか?」と言ったら、平成5(1993)年は第8回国民文化祭岩手大会、文化の国体みたいなものでありますから。「だからお金の心配せずにやりなさい」と言われました。それを聞いて困りました。国民文化祭には、平成3年まで苦勞して呼んだ有名な太鼓がまた来てしまうからです。4年目の出し物に困りました。私たちの最大の目標は何だったでしょうか? どれだけ優しく人を迎えられるかということです。優しく人を迎えるというのは一銭もかからないのです。若いやつに「河野さん、何であんな有名な太鼓ばかり呼ぶの? 上手なの?」と言われ、「フェスティバルにも格があつてよ」と言ったら、「た

かったのですが、ライトマンがパーンとスポットを消して、場内を明るくしてくれました。これはお願いしたものではありません。全部人の優しさから生まれ出たものなのです。大感動です。同情でこの太鼓に拍手喝采をしたわけではありませんでした。無心で太鼓を打っている姿にも大感動です。太鼓のテクニクは、もしかすると一番単純だったのかも知れません。けれど違います。私はテクニクだとか、有名だとかを気にしてやっていたのが、この時に頭を叩かれましてね。感動とはそんなものじゃないのです。

資金を出す県や国というのは口まで出します。あれをやれ、これをやれと言ってきます。私は県や国と喧嘩をしましたね。「太鼓のことは私のほうが詳しいのだから、資金を出したからって余計なこと言うな」と言ってやりました。県や国は、「今までの7回(国民文化祭)はこういうふう>To鼓祭りをやってきましたから、その通りやりなさい」と言ってきたので、「やりたくない」と言いました。そして、県の人が国民文化祭の前年祭に来て、4年目の太鼓祭を見て、「河野君、申し訳なかつた。太鼓のことをよく知りもしないで、偉そうに言った私が悪かつた。聞くところによ

かったら、私はわがままなただの坊ちゃん経営者になっていました。ボランティアの人たちに、どれだけ楽しく仕事をしてもらうかが大切なのです。私にとってはすごくいい経験でした。

本物の実行委員

「本物の実行委員」をご紹介します。毎年実行委員の数は変わりますが、今は100人ぐらいになりました。一時、多い時で170人ぐらいになったのですが、毎年違います。その中でも本物の実行委員とは、駐車場係です。自ら手を挙げて、駐車場係をする人たちです。14人手を挙げていました。ある年、私にファンレターが届きました。「あれだけ明るい顔でやっているあの実行委員の人たちの、そのリーダーであるあなたのファンです」と言うのです。次の年も届きました。「あなた以上にすごい実行委員を発見しました」と言います。「駐車場係の方々は、毎年ほとんど同じ顔ぶれだったのですね。すごいことです」と。その次の年には駐車場係のメンバーにだけ、チョコレートの違いが入りました。「私は駐車場係の皆さんのファンな

れました。アフリカ・セネガルの太鼓を呼びました。韓国のサムルノリという、ワールドカップサッカーの時に、2000人の太鼓を指揮したキム・ドクスさんのグループを呼びました。バリ島から、600団体のガムランの優勝チームを呼びました。

太鼓フェスティバルは商品だと言いましたが、実行委員、打ち手、観客が三位一体となって一つの商品ができています。また、観に来ていない、いろいろなまちの人たちからも応援をいただいています。10周年に、10年間ご苦労さんの拍手をいただきました。10周年で、全国太鼓フェスティバルが国際大会になっています。そして、合い言葉は元年から「命は鼓動から始まる」にしてあります。

運命を変える水俣との出会い

実は、平成7（1995）年に私の運命を変える出来事が起きました。国からこのフェスティバルが表彰されたのです。地域興しのお手本です。地域興しだなんて思っていていなかったのに、国が勝手に言うのです。

平成7年に地域興しの手本であると言って、水俣へ賞状

のです」と。太鼓を見に来る人たちから、差し入れが入るのですよ。大概のまちのイベントでは、駐車場係はほとんどがアルバイトです。アルバイトで、愛想も悪い。しかし、うちのイベントでは、自ら手を挙げて、駐車場係をやっている。そんなイベントを私は見たことはありません。本物の駐車場係というのは懇切丁寧で、来た時はいらっしやい、帰る時にはまたおいでねと言ってやる。それは、一人ひとりが自分のお祭りだと思っているからです。

10周年は国際大会に

平成10（1998）年の話をします。9年までは、私たちの「喧嘩七夕太鼓」が午後の1番目に打って、その後、それぞれの持ち場に散っていました。太鼓を打たない実行委員たちが、「10周年だもん、河野さん、あんたたちがトリを取らないで、いつ取るんよ。トリを取りなさい」と言います。私が「だって俺たちの部署、誰がやる？」と言うと、「いや、太鼓を打たない俺たちが二倍働けばいいんでしょ」と言います。

平成10年は、10周年のご褒美ということで補助金をいただきました。世界中の有名な太鼓を呼びなさいと言われてもらいに行きました。そこに吉本哲郎さんがいました。そこに介在したのが、あの有名な水俣の患者の杉本栄子さんです。杉本さんのお宅に行くと、杉本さんは散々苦労した話を明るく喋る。それを私は、ボロボロ泣きながら聞いていました。杉本さんは、「あんた、人生の中で一番悲しいことと、嬉しいことを味わったことがあるかい」と聞きます。私が「ありません」と答えると、「私は水俣病のおかけであるたい」とおっしゃいました。

水俣病の人たちは、人間関係をズタズタにされてきました。杉本さんは「村八分なんて楽なものよ。無視されるだけだから。私たちは、人間扱いではないんだ。鬼畜の扱いを受けた。火付けるぞと言われた。まちを歩いても物は売ってくれない。石は投げられる」と話します。皆さんはそんな経験ないでしょう。「いつ頃の話ですか」と聞くと、「東京オリピックの頃だ」と言われました。私が大学2年の時です。日本の片隅で、すごい悲劇があったのです。杉本さんは「捕った魚を山のほうの親戚にやると野菜や米をいっぱいくれた。それは良い関係だった頃のこと。でも、その野菜をいっぱいくれた農家まで村八分に遭うようになった。だからわず

かの米と野菜しか来なくなって、本当に白米を食べられるのは盆と正月、あと運動会と遠足だった」と言っていました。私には何のことだかわかりませんでした。杉本さんは「さっき言った人生の中で一番悲しいことと、嬉しいこと。私にとってそれは何か。運動会の際は給食がないから、弁当を作っていかなきゃいけない。私は何が嫌いかって、いじめられたことも嫌いだったけど、それは我慢した。親父の遺言で、いじめ返しはするなよと言われていたから。何とも我慢できなかったのが、運動会と遠足。弁当を作んなきゃなんない。うちの最大のご馳走は塩むすび一つだった。そのむすびがむすべないんだ。なんとかむすびの形にしてやると、子どもたちが、母ちゃん、俺一人で一つ食っているかと言う。今日は運動会だからいいよ、いいよ。子どもが、いただきますと言って食べようとすると、ポロッと崩れて、むすびがむすびでなくなった」と言いました。その時ぐらい水俣病を恨んだことはないそうです。そうしたら、子どもたちが両手でその米粒を一粒残らず食べて、「母ちゃん、このむすびは世界一うまかったよ」って言ったそうです。わかりますか？

意固地にならず、無添加でなければいけないとか、無農薬でなければ食べないということではないのです。少しぐらいの殺菌剤を使うことを許してあげなくてはいけない野菜もあります。農薬さえ抜けば無農薬というのは、とんでもありません。醸造と同じなのです。微生物が生きた土を作ってください。人間が勝手に化学的に作ったチツソ、リン酸、カリばかり入れていたら、6年で畑はおかしくなりました。生きた土をどうやって作るかということを教わりました。

杉本さんは、無農薬の甘夏を作っていました。私が「杉本さん、すごいね。理想的な半農半漁だね」というと、「何言ってるの。どっちも全身全霊かけているから、全農全漁」と言われました。杉本さんは新しい言葉を教えてくれるのです。「人様と過去は変えられないからね。自分さえ変わればなんぼでも未来は変わるからね。これが私の、あなたへのお土産の言葉だよ」と言われました。もし、私が太鼓なんていうイベントを仕掛けていなかったら、この出会いはないのです。本当に私はわがまま人間になっていたかもしれないです。おかげさまでいくらか人間らしくなれました。安全基準という基準が我が社にあります。それが厳し過

何が食育だと思えますか？ 一番大事なのは、食べ物に本当に感謝をしているかどうかです。どうしていただきますと言うか知っているかと言いたいのです。どうしてそれを、杉本さんに教わらなくてはわからないのでしょうか。食べ物は全部命のあったものです。その命をただかせていただきますということですよ。

世界中の言葉の中で、一番良い言葉が日本語にあります。ありがとうございます。親子や兄弟、友達の間でもありがとうございますという言葉が行き交わなくなりました。だから、最近ギスギスとして、日本がおかしくなってしまうのだと思います。そのことを、太鼓をやっていたおかげで水俣に行って杉本さんと知り合うことができ、吉本哲郎さんとも知り合って、本物を教えてもらったと思っています。

食の安全・安心を守るために

安全と安心は同義語ではありません。安全とは、数字というルールの中に押し込めようとするをいいます。安心とは、ルールも何も決まりはありません。人と人との信頼しかありません。だから本当は、安心な食べ物というのは、変に

ぎるので、我が社の製品は高過ぎて売れませんでした。そのため、実は、杉本さんと会った年に基準を下げようとしていたのです。基準を下げて安くしようと思っていました。ですが、そう思っていた自分が、杉本さんと会って恥ずかしくなりました。売れなくても、菌を食いしばって何とか我慢してやってきました。5〜6年くらい前から、中国で問題が起きたり、偽装したりという問題が起きました。それは、全て優しくない人間が自分の儲けだけを考えて食べ物を作っているからなのです。

7つの「ち」

私は人間なので、7つの「ち」をやるのです。7つの「ち」とは、愚痴、無知、けち、やきもち、陰口、悪口、告げ口です。愚痴は、愚痴をこぼしてもいいけれど、全然前には進めない。無知は、知恵も何も出さない人。けちは、普段けちでもいいですから、使うところでボンと使うのはけちではありません。やきもち、隣の畑がどうのこうのという、妬みに繋がるようなやきもち、駄目です。陰口、悪口、告げ口は、やるなど言ったって無理です。人間だからやりま

す。やったら、周りの人に懺悔してください。家族でもいい、友達でもいいです。「いやあ、やっちゃったわ。告げ口しちゃった、陰口しちゃった」と懺悔してください。あまりこの7つの「ち」をやらなくなったら、私は人生が楽しくなってきました。ところが、この7つの「ち」をやっている人が、やっていることにも気が付かないのです。これは間違いなく良い死にはできません。

最後に、私が今大事にしている言葉を差し上げます。「真剣だと知恵が出ます。中途半端だと愚痴が出ます。いいかげんだと言いつけが出ます」という言葉を。地元学に通じるかどうかはわかりませんが。

私は愚痴と言いつけの多い人間でありました。地元学、あるいは本物志向でやっているおかげで、少しは人間らしくなりました。これは結城登美雄さんと吉本哲郎さんと、杉本栄子さんのおかげであります。



吉本哲郎

【地元学ネットワーク主宰。1948年熊本県水俣市生まれ。水俣在住。】



主な経歴

1971年宮崎大学農学部卒。同年、水俣市役所に勤め、都市計画課、企画課、環境対策課課長、水俣病資料館館長を経て、2008年に退職した。1997～1999年まで熊本大学非常勤講師。現在、鹿児島大学生涯学習教育センターリサーチアドバイザー（2009～）、地元学ネットワーク主宰。国内外で、地元で学んで人・自然・経済が元気な町や村を作る地元学の実践にあたる。

はじめに

今日、皆さんに私がお伝えしたいことは、まちや村の元気を作るということなのですが、まず、杉本栄子、杉本雄、この水俣病の受難家族に学んだのが私の原点であるということ。これをお伝えしたいです。次に、私は「水俣の再生」というものをやってきましたが、そこには地元で学び自分たちでやるという地元学があった、という話をさせてください。最後に、実例として予算ゼロで水俣のどん詰まりの村を元気にしていった事例をお届けします。

杉本栄子・杉本雄 ～水俣病受難家族との出会い～

杉本栄子は2008年に亡くなりました。私が杉本栄子、杉本雄に出会ったのは1991年でして、ちょうど私はもうこんな役場にいられるかと辞表を書いていた頃でした。しかし、企画課で、水俣の再生と水俣病問題の解決という仕事をやれと言われて、これは逃げられないと思いましたね。その時に、会えなかった、会おうともしなかった患者に会いに行ったのが、この二人です。

最初の出会いは衝撃でした。栄子さんたちの身体は水俣



- 1 水俣病受難者に学んだ地元学
- 2 水俣の再生には地元学があった
- 3 地区を元気にした地元学
「村丸ごと生活博物館」で元気に
- 4 ほかの事例
- 5 では 地元で学ぶ地元学とは
- 6 まとめ

病で大学の医者でも治せません。ですから、薬草に興味を持っていた頃、私が行って「役所から来ました」と言ったら、「薬草じゃなくて、役所の話か」と。嘘みたいな本当の話です。「役所とわかっていたら断るんだった」と言っていて、怒りながら家が上がれと言うのですね。

そこで二人の話を聞かされました。酷い話で声が出なくなりしました。たくさんあります。村を歩いていたら、最初に水俣病になった母親のトシさんを隣人が崖から突き落とすして、這い上がってきたら突き落として……。地獄でしたね。信じられません。突き落とされた下のほうで糞尿をぶっかけるとか、家のガラスを全部割られるとか……。

私は水俣の再生を環境から始めようと思っていましたので、聞いてみたのです。「一つだけ教えてくれないか。俺は農村に生まれた。だから農村、山村、漁村のことだったから少しはわかるような気がするが、町の人のことがよくわからん」と。そう言ったら、栄子さんは、私に「あんたは何者か？」と言うのです。私は普通なら「役所の者」と職業を答えるのですが、言えなくて、私は「俺は山もんたい」と答えました。そうしたら栄子さんは「わかった。海の者

た。ある時、栄子さんが後を追いかけて行ったら、誰もいない裏山で進さんが泣いていたそうです。それから栄子さんは、村の人にいじめられたという話は一切しないというふうに決めたそうです。辛かったですよね。

進さんは亡くなる前に、「俺が悪いのか、いじめられている俺が悪いのか、それともそうではないのか、この世の中には裁判というものがあるらしい。それではっきりさせてくれ」と言いました。これが遺言でした。この遺言どおり裁判を続けていいたら、親戚まで使って（被告の）チツソは切り崩しにきました。結局、村でたった一件の裁判する家族になってしまい、凄まじいいじめが始まっていきました。それでも仕返しはしません。「お父さんの言いつけを守るのは難しかったけれど、いじめた人様は変えられませんが、自分が変わるといいう気持ちでやってきた」と栄子さんは言っていました。

栄子さんと吉井市長との出会い、市長退任後の苦難

これに心を動かされたのが林業をやっている吉井という市長です。どちらかというと吉井さんは保守系です。です

と山の者が繋がれば、水俣は、まちはどうにかなる」と。これですね。これをわかってください。水俣の再生は、この患者との出会いです。そして海と山の繋がりで。たった一人と一人、一軒と一軒の繋がりが、同じ山もんで無農薬のお茶を作っている松本和也、天野茂、浩君という人たちに繋がって行って……。それが始まりにあります。

水俣病受難の母へのいじめ、

いじめ返しはするなという父の教え

「いじめ返しをしたい」と栄子さんが言うと、父の進さんはするなと言うのです。「昔はいい人だった。俺が堪えていく、いじめ返しはするな。網元というものは、木を大切に、水を大事にして、いじめた人でも好きになれ」と言いました。しかし、進さんは、妻のトシさんが最初の水俣病の患者になって、病院に連れて行きました。でも、伝染病と疑われていたので、村の人たちは家に隠していました。魚が売れなくなるからです。村を歩くと言われ、道を歩けなくて、鎌で裏山に道を作りながら行っていま

が関係なく付き合ってくれました。2期8年間務めました。吉井さんは「鉄砲の弾が後ろから飛んでくる」と言っていました。同じ身内の政党から無茶苦茶ないじめを受けました。もう駄目だと、8年後の議会で次の選挙には立候補しないと宣言をして、姿をくらしました。それを聞いた栄子さん、雄さんは私に電話をかけてきました。「市長に会わせろ、吉井さんに会わせろ」と。明くる朝、いの一歩に私は連れて行きました。私と吉井さんと栄子さん、雄さんで会いました。私は、栄子さんはまた出馬してくれと頼むのだろうと思っていました。違いました。「吉井さん、あんたもきつかったな」と言いました。吉井さんは泣きました。70過ぎた男が泣くのですね。私は黙って見ていました。

2期8年で私の環境に関する取り組みはやり遂げましたから、幸せな8年間でした。けれども、その次に地獄の4年間が待っていました。吉井市長を批判した県議会議員が、全国一若い市長として誕生しました。吉井さんは退任後、栄子さんと雄さんの所に行って、こう言ったそうです。「これから吉本はいじめられるだろう。その時はこうしろ」と。市役所の職員は皆どう喝されたりしましたが、私は怒られ

ませんでした。面と向かって怒れないのですね。陰じゃすごかったですけどね。市長が呼んで怒ればいいのですよ。男らしくありません。

この「人様を変えられないから自分が変わる」ということに、本当に吉井さんは心を動かされていました。市長に当選したら、患者のところへ一人で訪ねて行った男ですよ。なかなかできませんね。

水俣は世間に本当に嫌な目に遭ったのです。四十数年間、結婚が駄目、就職も駄目、農産物は水俣で売れない……。市民も悪口を言う。中には嫌がらせの電話をする、怪文書を出す……。など、人間関係の嫌なところが全部出てきたまじです。まあ、来てみてください。水俣には人間関係の全てがあります。だから強くなりますから……。

「祈る、全部許す」 ～栄子さんの思い～

栄子さん、雄さんはある日、医師から泣きながら言われるのです。「すまん。私にはあんたたちの身体は治せん」と。栄子さん、雄さんは「わかった。大学の先生でも治せんから自分で治す。食べ物でなった病気だから、食べ物で治す」

1時間ほど話をしようやく母に彼らが水俣病の患者だと伝えました。母が彼らの悪口を言わなくなったのはそれからです。その時私は、距離を近づける、それから話し合うということ、対立のエネルギーを水俣を作るエネルギーに変える、そのためには、お互いの違いというものを認め合うということに気がきました。この考え方はその後の水俣の動きに影響を与えています。素晴らしい出会いでしたね。

漁の再開と子どもたちの成長

「良い森があるから魚がいる。木を大事にしないとね。水を大事にしていたら水俣病は起きなかったのになあ。自分たちの命を支える水だ」と、二人はそう言っていました。子どもは男5人。真つすぐな子どもたちです。家族づくりが大切だと教えてくれました。なぜでしょうか？ 子どもが二人を支えてくれたのです。これは自殺せずに済んだということですよ。

この二人は天馬船みたいな樽漕ぎの船で、毎日海に出てどこで死のうかと考えていたようです。しかしある時、魚が船をコツコツたたく音がしました。子どもは「父ちゃ

と答えて、薬草採りに行きました。ところが、薬草よりも三度三度の食事を薬食にしようという考えに変わっていききました。

「水俣の土になるために、健康な身体で死んでいきたい」というのが杉本栄子、雄の言葉です。人様に毒は食べさせられません。ですから無添加のいりこを作りました。本当においしい、プロの料理人が欲しがります。私も、一番最初にゆがいたシロゴをご飯にかけて、お茶をかけて、醤油をかけて食べたのです。おいしくて涙が出ましたよ。びっくりしました。

栄子さんは「祈る、全部許す」と言っていました。なぜでしょうか。そうしないと辛いからです。「祈らずには今日は生きていけません。自分たちの魂が生きていけません。人の罪に祈る、我が身の罪に祈る、私をこんな身体にしたチツツの人たちも助かりますようにと祈る、そうしないと自分たちも助からない」と言っていました。私にはできませんね。

私の家に夜逃げの町だった綾町を再生した郷田實（宮崎県綾町前町長）夫妻が来た時に、栄子さんと雄さんも来てくれました。この時、話の輪の中に私の母もいたのですが、

ん、魚がおる。魚が捕ってくれて言いよる」と言いましたが、雄さんは「俺、見えんぞ」と。その翌日です。雄さんは子どもを抱えて銀行に行つて6000万円借金して、2000万円の船を3漕作つて漁を再開していくのです。その頃から動かなかつた左手が少し動くようになっていくのです。

子どもは漁師になって、4時半に出て、それから学校に行っていました。弟たち4人の親になったのは長男の杉本肇君です。肇君は「母ちゃん、家は売ったのか？ よその人がおる。母ちゃん、家におれ。母ちゃんの代わりは俺たちがする。母ちゃん、長生きせんばつたらん。長生きするためには笑わんばつたらん。踊つてみせようか？」と言っていました。こういう子どもでしたね。本当に親思いの子に育っていますよ。

二人は水俣病のおかげで、人にも魚にも出会うと言っていました。今では水俣病は、私の守り神だ、守護神だと言っていましたね。こういう心境には私はなれませんね。

栄子さんの死

ある日、栄子さんに呼ばれました。何か見せてくれるのかなあと思っ、はいはいと気軽に行ったら、あと一年の命だと言うのです。驚きました。「泣きたいけど、私が泣くと子どもが泣くから泣かない」と言っていました。私は一週間仕事になりません。手がつきません。もう困りました。

2008年2月28日、栄子さんは69歳で亡くなりました。肇君が挨拶してくれました。「母は病気があったけれど、家族のためにしっかり生きてきました。一生懸命支えてくれて育ててくれて、ありがたかった。病気の身体で5人を育てるのは並大抵のことじゃなかっただろう。最後の若が家族というのを教えてくれました。身体は不自由でしたが、自分の体験を積極的に語っていました」と。

葬儀には1000人も人が駆けつけて「あなたのお母さんのおかげで勇気をもらった」という言葉もいただきました。肇君は最後に言いました。「お母ちゃん見るとるかい。今日は大漁じゃ」と。

お通夜の席で肇君は私にこう言いました。「吉本さん、あんたと会ってからうちの母ちゃん元気やった」と。

そのことを教えてくれた」と言うのです。私はこの時に「俺は、そして俺たちは、皆で何をしてきたのかなあ」と考えました。「嫌なまぢ、水俣だけど、皆でここに生きていかにゃいかん、ここに生きる希望を皆で作ってきた」と、そんなことかなあと思いました。

これは結城さんの言葉ですが、「さもない話、小さい話を大事にしてください」と。全く同感です。足元は小さいと思いましたが、実は大きい世界があると、私も思います。たった一軒の杉本家ですけど、手掛かりは大きい。私はそう思います。

未だ終わらない水俣病

現在、2269人の認定患者、しかし今、新たに2万人を超える人たちが、53年経っても救済は終わりません。救済というのは面白い言葉ですね。救うと書いてあります。

しかし、最高裁の判決で、国も県も責任があるという判決が出ましたから、原因者が救済なんてないですよ。これは賠償でしょう。償いでしょう。これは国の犯罪ですよ。冗談じゃありません。

ちょっと慰めになりました。

杉本家族から学んだこと

大事なことはやい、のさり、出会いと命です。「もやい」というのは一緒にやるということですね。仕事をするとか、繋ぐとか。「のさり」というのは授かるという意味ですね。水俣病ものさりだと思いなさいと。水俣病も天からの授かりものなのだから、不幸な出来事も積極的に受け入れていくということですね。私にはこれもできません。

この受難の杉本栄子の家族、そこには復活に向かい生きる姿があったと思います。実は受難には復活が予定されていたと、私は考えるようになりました。それを私は水俣づくりに応用していったということです。「一即全」という言葉があります。小さい、小さい一つの家族かもしれませんが、しかしそこには全体があります。決して小さくはありません。私はそれを応用していきました。学ばせてもらいました。

手掛かりがありました。映画監督の土本典昭さんが「人は絶望と恨みだけでは生きられない、だけど水俣は違った。

今、水俣病資料館では「胎児性患者たちが気がかり」という企画展示をやっています。なぜそれを展示するのかといえ、胎児性患者というのは、初めての出来事だからです。化学毒が胎盤を越えてしまします。実は毒は胎盤が守るのです。しかし化学毒は胎盤が守れないのです。これは世界で初めての出来事なのです。そこに学ばないと駄目ですよ。ですが、今はコンビニのおにぎりの中にも50種類ぐらいの添加物が入って、平気で食べている人がいっぱいいるではないですか。言いにくいですけど、結婚して最初に生まれる子どもは危ないですよ。良い水と食べ物求めて逃げたほうがいいですね。これは水俣の教訓だと思うのですが、自分はそうではないと思ひ込んではいけません。その時になったらもう遅いのです。

水俣の地理・歴史は日本の縮図

水俣湾の環境復元は13年間で485億円かかりました。悲劇の海と言う人もいた水俣の海が、公害防止事業で蘇ってきました。運輸省と熊本県がかなり頑張りました。この藻は水俣の海ですよ。すごいでしょう。私はサンゴの生息

の確認もしました。海はもう再生を始めていました。人間だけが遅れていました。やればできると教えてくれたのです。

水俣には、川の流域のまちであるという特徴・個性があります。また、明治以降100年の工業都市化の動き、これは日本の縮図のようです。水俣の地理と歴史というものは、日本の全てをギュッと縮めたような所だと。水俣には全てがあります。水俣で考えたら、小さい全体が、小さい日本がありますから、見えやすいです。そういうふうに使おうといいのかなと思いますね。

水俣の環境を再生する 村の佇まいは水が作る

水俣病患者救済の次に「もやい直し」をやりました。これは、壊れてしまった人間関係をやり直す、そして水俣と一緒に作っていくということです。荒んだ気持ちのままでは再生はおぼつかないのです。

使い方がわかると村の水の使い方がわかる、同じだ、水俣のまちも同じだと。水に関して責任を持つ範囲を——家とか集落とか——それを私の地球と言ってやればいいのです。私の母は、「環境」なんて言葉は使っていませんからね。これはもうびっくりしました。使っているのは私でしたからね。私のような役人や学者、専門家などの人たちとジャーナリスト。これらがよく使うのが「環境」ですね。特徴がわかりますか？ 反省をしないこと。それから生活の当業者ではないこと。この人たちがよく使うのが「環境」ではないですか。

そこで母は何を使うかと思ったら、雨が降ったとか、梅雨になったとか、鳥が来たとか、明日、霜は降りるかなとか、そのような具体的なことを言っていました。では、私たちが毎日使っている環境は何かと考えたら、飲む・使う水でした。私も使っている水を調べるところから水俣は始まっていきました。面白かったですよ。村の佇まいは水が作っていたというのに気が付きました。

水俣の取り組みの特徴ですが、皆でやった、女性の力を生かした。これは大事だと思います。予算ゼロもかなりあ

水俣の取り組みの特徴

- 1 みんなで調べてやった**
調べた人しかくわしくならぬ、下手でいいから自分たちで調べていった
女性の力をいかした 受難者たちに学んだ
- 2 安い、国・県の補助に頼り過ぎていない**
お金をかけないで、手間ヒマかけた
- 3 水俣の個性を把握した**
アイデンティティの高さにならぬこと 交流と自己を知る
- 4 過去に学び、変化を適正に受け止めた**
- 5 循環する自然の仕組みに学んだ**
- 6 ライフサイクルアセスメント手法の導入**
- 7 目的・方法・組織を明らかにした**
- 8 水俣病の犠牲を無駄にしないよう
水、ごみ、食べ物に気を付けている**

あるもの探しから始めていきました。ないものねだりをやめて、あるもの探しをしました。ないものねだりは愚痴である、あるものを探して磨くのが自治である、愚痴を自治に変えました。言うのは簡単ですね、今思えば。そして、水に気を付けていきました。自分の家を調べて、自分の水の

ります。過去に学んだ、自然の仕組みに学んだ。また、誰がどのように何を、ということ明らかにしました。これはISO14001というマネジメントシステムの導入です。大事なものは、水とごみと食べ物に気を付けていくということ。これが水俣の環境ですね。世界のどこよりも厳しいです。

村丸ごと生活博物館

村丸ごと生活博物館です。これは4カ所でやっていて、大川と越小場（こしば）と頭石（かくめいし）が結構盛んです。この3カ所を簡単に説明します。これらの村はどん詰まりの村でした。親戚しか行かなかった村でした。なぜか？ 用事がないから行かないのです。あそこに村があることを誰も知りませんでした。けれども、今は結構有名な所になりました。元気がある。これだけ家があつて賑やかだと皆さんお思いではないですか？ 実はこれ、周りには家がありません。40世帯しかありません。

生活を案内する学芸員が8名、生活職員が15名いて、条件は「ここには何もない」と言わないこと。そのために足

元にあるもの。自分の家ですね。それから村にあるもの、これらを写真に撮って整理して、地図を作って、それで案内をしていきます。暮らしを案内します。お客さん一人あたり1000円もらっています。大事なことです。まだ大事なことがあります。ちょうど昼飯にかかるように案内することです。1500円になります。

ここは、売上の一割、1000円を村に返しています。なぜか？ 8人しか儲からない、お金がこない、あと32世帯にはいかない。ひがみやつかみの対象になります。ここは新しい共有財産として返していったのです。これは偉かったです。もう50万円を超えました。これは私の知恵ではありません。村の人の知恵です。

修学旅行生がたくさん来たりします。小嶋待子さんは「30年前からこうなればいいと思っていました」と言い、小嶋利春さんは「以前は台所に立つのが恥ずかしかった。洗濯ものを取り入れるのが恥ずかしかった。今は恥ずかしくありません。ごみを捨てるのは恥ずかしかったけれど、今は拾わないと恥ずかしくなった」と言うのです。これは大変な変化ですよ。女子高生の言葉で「おじちゃん、最高」

外に向かっていた眼差しが、自分の足元に向かい始める。これが誇り、自信の回復に繋がるのでしょうか。それが起きましたよ。料理のレシピ集というのを作っていて、これは水俣でナンバーワンのベストセラーです。500円で買って売って、うちの職員がこの収益金でこの村の人たちを旅行に連れて行きました。

地域の力と人の持っている力を引き出す

地元学の事例です。三重県度会郡大紀町田野原地区は166人、88世帯、生活の達人率（高齢化率）53%という所です。そこで地元学をやりました。私は、ここは女の人たちを走らせて、男が支えていけばいいと言いました。すると地区の女性たちで、オハツキイチヨウを拾って、洗って、干して売るようになりました。皆で15万円くらい、次の年は20万円です。今年は廃校になった学校で運動会やろうと。地元学をやったからの地元の人たちの感想です。「今までではそうでもありませんでしたけれど、地元学のあと、何となく目の前が明るくなりました」と言っています。

2009年の3月に行きました。どうも村の男たちは、

とありました。おじちゃんは張り切るはずですよね。「頭の男はいい男です」なんて、嘘でもうれいすね。

水俣の自信回復　く進むものづくりく

村丸ごと生活博物館には、これまでに5585人来ました。海外からも来るようになりましたね。住んでいる人が元気になり、村の良さを外に行って教えてくれる。タダの食べ物がいっぱい山にあると気付いて、おばあちゃんは生きがいになっていきました。来た人たちが漬物などをおいしいと言ってくれます。一言、おいしいと言えればいいのですよ。意外な効果として、村が化粧をしていくようになりましたね。知らない人に見られると化粧するようになるのですね。だから女の人は、知っている人ばかりの家では化粧しないのですかね（笑）。

意外なものづくりが進みました。これが本当の狙いです。加工所ができて、週に一回弁当を配布するようになりましたけれども、野菜が足りなくなって、慌てて畑で野菜づくりが広がっていきました。正しいことで人は動かないのです。欲で動くのです。これが大事ですね。

私に「村の女たちの暴走を止めてくれないか」と、こんな感じを受けました。火に油を注いで「このまま行け」と言うので帰ってきました。今ここは元気になってきました。

地元学は地域の力と人の持っている力を引き出します。これが大事です。やはり自分たちでやる力を身に付けるというのが問われます。あるものと、あるものを新しく組み合わせ、新しいものを作る力。これはもう本当に勉強、訓練、鍛錬しませんが、これが足りません。だから人に頼んでしまいます。また、調べるのを外の人だけに依頼したりすると、外からやられますよ。自分たちで調べて、知を集積していかないと。知の植民地にならないようにしたほうがいいです。私はそう思います。

それから、おのれと地域をよく知らない、外の人にかぶれたり、外の地域にかぶれたり、全面的に拒否したりする過剰反応が起きますね。それはアイデンティティ閉塞症。病気です。人の話にかぶれたり、拒否するというのは、おのれと地域をよく知らないから起きます。おのれと地域を知り、変化をなじませて受け入れていく、これはとても大事なことです。



地域固有の思想・哲学・美学を持つことの重要性

まとめになりますが、私が最近言いたいのは、地域固有の思想・哲学・美学を持ちなさいということ。全国なかなかありません。金がなくてもここは守るとか、金がなくてもまちの中心部は動かさないとか、そういう価値が共有されると思になります。これがありません。なぜでしょうね？ お金が価値だから捨てられていくのです。どうもそれが気になります。

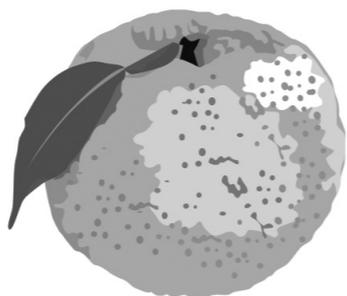
私の知り合いにドイツ人のピアンカという人がいます。彼女は言うのです。「ドイツの皆が最初から意識が高かったわけではありません。地域社会を見る力、意見を発言する勇氣、責任感、それから話し合っって仲間を作っって行動する力を練習してきました」と。私たちに必要なのは、練習ではないでしょうか？ 言えはやれると思ひ込んでいます。言うだけでは良くはならないですね。訓練、練習が重要です。特に地域社会を見る力、これは地元学でかなりできると思いますよ。

私なぜ女の人を走らせたかという、行動が早いからです。女の人には好き嫌いで考えます。男は正しいか、悪い

かで判断します。100点を目指しています。ですから、いつまでたっても行動はできません。好き嫌いでやっている女の人のほうが早いです。ですから困ったところほど女の人を走らせた方がいいと思います。

まず自分たちが元気になることです。そして、地域の持っている力、人の持っている力を引き出しましょう。驚いて質問してです。教えないで……。教育の原点は、ラテン語で「エデユカーレ」と言います。これは「引き出す」と書いてあります。教育の語源は「引き出す」です。

愚痴を自治に変えて、あるもの探しから、自分たちが、そしてあるものが、すごいことに気付くことから。そこに、人が元気で、自然が元気で、お金と協働と自給自足する3つの経済で、元気な町や村への一歩が始まるのだらうと思



座談会

結城登美雄×河野和義×吉本哲郎×阿部治



阿部 まず、村のおじいちゃん、おばあちゃんの心を掴む秘訣はなんでしょう？

結城 村の人はいつも何かしら仕事をしています。僕はアポイントを取って取材というのは、ほとんどしたことがないです。ただ行きます。麦の刈り取りの頃は麦、サンマが取れるならサンマの場所、そこに行く。その時には名乗りません。「今年の出来はどうだ？」と聞くだけです。そうすると「まあ、駄目だな、去年よりは」と言う。あるいは、「ちょっとこれサビ病じゃないか？」と言うと「そうなんだよな、農薬使いたいけど使いたくないし」と言う。

人は仕事をして生きているわけだから、その仕事のことだから、いつだって会話はしますよ。そういうやり取りをしている間に、僕が「あっちの村ではこういうことやってたけどなあ」なんて言うと、「それどこだ？」とか言って、10分、15分経つと僕に気付いて「お前誰だ？」ということになるわけです(笑)。

「お前誰だ？」「いやちょっと仙台から来たんだけど……」「何で仙台から？」「何か麦刈りだっというし……」「俺んそこあんまり麦やってないんだわ、米ばかりで」と

いう感じで、なんとなく四方山話。つまらない話はいっぱいします。つまらない話っていうのは、お茶を飲みながら、村の人同士で「今年の出来はどうだ？」「いや、駄目なんだよ」というのと同じようにやるだけです。そうすると、気付いた頃にはずいぶん喋っている。「ここではなんだから、ちょっと(家に)上がるか？」と言われてちよつと上がったり。

村の人は、皆同じ場所に居ながら話すことをしなくなっていると感じました。村に限らず、日本は話す場、会話をする場を失った。でも、気付けば「お母さん、もういいから」っていうくらい喋りますよ、たくさん話したいことを。話を聞いてくれる人もいないのです。息子は「もう聞いた。また同じかよ」って逃げるんですけど、本当は何度も話したい。何度も話して、それにグズグズグズと付き合うのが地元学ですね。

吉本 「お茶飲んでいけ」と言われるんですけど、かなりの確率で泊まって帰るんじゃないかな。

結城 (酒を)飲むしね。「飲むか？」と言われたら、「はい」っ

阿部 続きまして、地元学そのものについて。まず、子どもですね。その地域の子どもの役割です。地域の子どもにとつての地元学とは何か？

てなるし、「持つて行くか？」と言われたらお土産が出るでしょ。「泊まるか？」って言われたら「はい」でしょ。地元学というのは、要は暇でヤクザな人間が合うんですよ。朝8時には出社しなきゃいけないっていう人はなかなか難しい。

吉本 「子ども地元学」というのはあります。一番有名な事例は、三重県の藤原町で、地域を「屋根のない学校」に見立てて、教室だけでは、学校だけでは教えられないことを教えている。塾にも行かないのにすごく頭の良い子たちができた。そういうのがあります。ただ、学校は先生が忙しくて、子どもも忙しいから、相当、力業でやっていかないと難しい。川南が学校の地元学を始めています。近く発表会があるので行くのですが、楽しみです。本音でやると非常に面白い。

河野 子どもには地元学という言葉は使いません。うちは

味噌・醤油屋だから、学校から大豆を作ってみたいと言われて作らせました。畑を作る時に、学校の先生は、子どもたちに知恵を出させて、この地域のどのおじさんに頼めばブルドーザーで畑を作ってもらえるかを、全部子どもたちにやらせていました。そして、植えて、実がなった。でも、鹿に食べられちゃった。大豆を作る前は「鹿ってかわいいよね」と言っていたのが、「鹿って憎らしいよね」に変わりました。それも生活の知恵として覚えていく。まさにそれが地元学なのですけど、いちいちそれが地元学だとは言わな

いです。
それから、うちの地元の5年生には、田んぼに入れて田植えをさせています。出来上がった米で純米酒を造って大人たちが飲みます。「お前たちも早くこういうので飲むようにしろ」って(笑)。中学1年生には、1本ずつキュウリを植えさせました。名前を書かせて。キュウリって種を2個ずつ植えていく。出来の良いのを残して、ちよつと出来の悪いのは殺してしまう。あとはやり方だけを教えて、サボる奴は草だらけになるし、きちんとやる奴はきちんと草取りにも来て。まず自分の作ったキュウリをもいで、食べ

子どもと関連して言うと、実は「1杯24円」というのは、子どもに教える時に使った道具です。子どもには宿題として、身近な24円のモノを来週までに持ってこいって言うんです。次に行った時には、「ウーロン茶このぐらい」とか、消しゴムを切って「24円でした」とか、えんぴつの芯を持ってきて「2本半で24円でした」とか、そういうふうにならずにと並ぶんです。「どう思う?」と聞いたら「おかしいと思う」と言う。「どうしたらいい?」って聞いたら、「僕は何もできない」と。たぶん、その悩みと、よそ者の戸惑いが少しあると思うけれども、そうではなくて、僕は「じいさん、あんたが作った米が買いたいんだけど。僕は食べたいんだけど」と言うのは十分な地元学だと思っています。

阿部 要するに、よそ者なんだけれども、その地域と関わりを持ちたいということだけで十分だと。

結城 結局はよそ者なことなんです。もっと言うと他人ごとなんです。それを自分のことのように思う気持ちがどこかにあるんだけど、自分のこと、あるいはもっと大げさに言えば

る前に折って、くつつくかどうかっていうのを見てみると。くつついたら、家にお土産で持って帰って、「俺の作ったキュウリだ、私の作ったキュウリだ」って持っていけて。こういうのって、学校では教えないですよ。キュウリ嫌いの子どもが自分の作ったキュウリを好きになって、急にキュウリ好きになりました。

阿部 次の質問は、よそ者にとっての地元学とは? です。その地域の人だけではなくて、よそ者が関わるることによってどうなるかというような。また、都市在住者への期待ということも含めていかがでしょうか?

結城 僕は、気になったら気になったことを言いたくなるんです。こうすればいいというくらいの判断は少し出来るので、その時に余計なお世話をするわけです。

例えば、お米でいえば、「どうしたらいいんじゃない?」って。「それを俺に代わって作ってくれよ」って。「俺は食べるから」って。それがよそ者の関わり方では駄目でしょうかね? あまり啓蒙とは考えていないんです。

当事者の一人としてささやかにできることは何だろうか、と考えてみるのが大事なのではないでしょうか。国の人は啓蒙だっていうふうにいるが、ちやいけなと思うんです。

僕は「何かできることはないだろうか?」と考えます。でも、それは普段からやっていたんじゃないかと。誰かが重い荷物を持ってたら持つてあげましたし、車が坂道を登ってたら押ししました。でも今は、「もっと良い道具使えばいいのに」「車で運んでもらえばいいのに」「宅急便に任せればいいのに」って、ただ言ってるだけ。押しやれよって思うんです。押し気持ちに素直であればいいんじゃないのって思います。

阿部 義理人情、お節介の話ですね。

河野 都会の人が来て、野山かけずり回って、その時に「これがグリーンツーリズムだ」って誰かが言ったので、私は「俺、そのカタカナ文字嫌いだ」と言いました。「グリーンツーリズムって言わないで、陸前高田では『旅の産直』って名付けようや」って言ったんですよ。産直がいっぱいあって、旅行代理店が相手にしない所を、本当の人の付き合いで案

内してやるんです。案内して歩いた時我々が当たり前に思っている何とも思っていないものを、外から来た人は「あれは何？」って言います。「何でそんなこと聞くの？」って思いつつ、聞かれるから答えていかなきゃいけないんですが、途中まで答えて結局は「これより詳しく知ってるのはあのじいさんだ」って。「あのじいさん連れてきて」ってなります。

ある時、子どもたちに蛍探しをさせたんですよ。子ども、その親、そのおじいさん、おばあさん、皆で外へ出て歩いて。平家蛍しかないはずなのに、子どもたちが源氏蛍の大集落を見つけました。そうしたらおじいさんが来て、「あれは誰々の田んぼだよ。何であそこに蛍が出たかわかるか？」って、いつの間にか環境問題を話し始めたんです。「農業を使ってないんだ、あの田んぼは」って。意識的に農業を使っては駄目だと教え込むのではなくて、蛍を見つけて大したもんだって褒めた子どもたちに、「なぜか？」っていう事を教えていくと、地元が最終的に環境問題まで教えていたんです。

吉本 啓蒙っていうのは上から目線ですね。あまり良くないなって思いますね。当事者になるっていうことが大事でしょ

まって……。僕はやっぱり会話がないと、と思います。地元学って黙々と文字ばかり書いてたつてしようがないと思うんですよ。喋る場、会話をする場を持つとよと。ちょっと空いてるベンチに座って、「これ、いいもの見つけたんだけど、どう思う？」っていうあたりから会話が始まらなければ……。愚痴になったつていいんですよ。お互いが愚痴を言い合う関係で、また言いたくなつたら集まるつていうのもいいんじゃないかな。そんな中で「田舎じゃ米が大変らしいな」とか言つて5、6人集まると、「河野さんのところの3千円の商品を5人で買って5分の1ずつ分けようや」って言えば、河野さんは喜ぶわけで。

やっぱり人は一人ではないと。人は一人では難しいから都市はなおさらそうなんじゃないですか。人の力が、気持ちが集まることの大切さということが、僕が地元学で言つてみたいことのような気がしています。

阿部 当初の狙いとして、ESDに地元学が非常に貢献するんじゃないかということを考えたい、共有したいということをお願いしました。実は、私は埼玉大にいた時、

うね。あるところで、墓石を作っている70歳くらいの人が私に言うんです。「墓石が売れない」って。「だけど切る道具はある」って。そこで私はコーヒー用の小さい石臼を作つては、と思いましたが。しかし、その時には「作つてくれ」とだけ言ったのです。「こうしてこうしたら儲かるから」とは言わないで、「1万5千円出すから作れ」って言ったのです。一週間後に、できたつて言うから行つてみたら70歳のおじいちゃんじゃなくて、息子が作つていたんです。今、儲けてますよ。だから、「あるものを生かして、違うもの、新しいものを作ればいいんです」とか言つたら駄目ですよ。「1万5千円出すから頼む」っていいことではないんじゃないですか。結城さんと同じですかね。

阿部 都市での地元学の実例はありますか？

結城 地元学っていうのは、単純に言うとな隣人のことを考えるということなんじゃないかって気がしているんです。都市というのも農村と同じで、隣人との距離がほとんどゼロ口になっていく中で、「あんた出身どこだ？」から会話が始

2000年に水俣を訪問しまして、その時に吉本さんとお会いして、それ以降、何度か水俣を訪問しています。そのたびに水俣の人たちがどんどん元気になっていくということを実感しました。私自身は、社会の当事者としての力、当事者として行動する力を得るとというのがESDだと思っています。具体的には、繋ぐ力、共に生きる力、参加する力、あるいは未来を描く力とか、そういう力を私たち自身が得ていくという、そういうことを思つた時に、今日、3人の先生方がお話ししてくださつたこと全てがこれに繋がっていくような気がしました。

まだまだ、当事者として関わらない研究者は多いです。傍観者の的に見ている研究者が非常に多いです。そういうなかで、私たちは当事者として関わっていくということを目指して今までやってきております。そういう意味で、今日このお話を生かして、まさに持続可能な未来、地球のあらゆる所、あるいは日本のある場所ですれが実行できるような行動に関わっていききたいと思つております。今後とも3人の先生方にご協力頂きまして、皆様と一緒にやっていきたいと思つております。

参加者の声

充実したイベントでした。お三方の話が面白かったので、それぞれじっくり聞きたいと思いました(30代 男性)。

理論より行動されておられる先生方のお話、大変有難うございました(60歳以上 男性)。

去年の秋に水俣に行ってきました。町を歩いて、田んぼの美しさ、頭石のおばちゃん達のご飯の美味しさを思い出しながらお話を聞いていました。コンビニもない・・・逆に東京には何があるんだろうと考えさせられました(20代 女性)。

「人の繋がりというのが空間を超えてあるんだなあ」という言葉が響いた(20代 女性)。

この3人のお話を一堂に聞くことができ、大変、有意義な会でした。お話の内容が充実していて、面白く、かつ感動的でした(40代 女性)。

とても感動しました(30代 男性)。
ESDに目を開かされました。「人と繋がる事」「人と人を繋げる事」の大切さを再認識しました(40代 男性)。

ベテランの方々の熱い思いを聞いて大変感銘を受けました(60歳以上 男性)。

三者三様の内容はそれぞれ面白かった(60歳以上 男性)。

人生で初めて、自分で決めて聞いてみたいと思い今回来ました。来て、お話を聞くことができ、本当に良かったです。結城さん、河野さんのお話には自然と涙が出てくるほど感動しました。地元学という言葉は初めて聞きましたが、私が一番興味があった学びでした(19歳以下 女性)。

地に足のついた活動、ご経験からの発言、ご提言には、重み、深さがあり、心を打たれました。今日の学びを次に生かしていきたいです(20代 女性)。

笑いあり、涙ありで大変楽しかったです。地元学を通して、生きてい

く上で大切なことを考えさせられました(20代 女性)。

地元学は究極の道徳学だと思います。お三方ともに「いかに面白いか、楽しいか」が大切とおっしゃっていましたが、そこに深さを感じました(30代 女性)。

離婚、自殺など増えている中、家庭内のモラルハラスメントを研究しています。今日の講演をお聞きして、家族と共に食事をするという意味を知りました。家庭が楽しいことが生きる力になります(50代 女性)。

地元の料理をどのように「名物化」するかがとても参考になった(60歳以上 男性)。

縦横無尽でありながら、お三方それぞれ切り口から「地元学」についてお話いただき、大変勉強になりました(20代 女性)。

結城先生の話はすごく引きつけられました。もっと聞きたかったです。これから私たち一人ひとりがどう暮らすべきか、何を考えなくてはいいかわからないか考えさせられました。地方がどこも東京ナイズされていてつまらなくなってきたままです。対しておかしいと思っていました。その感覚がおかしくないと自信になりました(30代 女性)。

いずれの方も熱弁、学ぶところ多く、大変参考になった(40代 男性)。

結城さんの講演は説得力があった良かった。河野さんの講演は組織する方向性が感覚としてわかった。吉本さんの紹介していた杉本さんの祈りの話も良かった(50代 男性)。



ESDへの期待

ESDという言葉が、一般の人にはわかりにくい。その奥にあるものをどう伝えるかが、課題なのは(30代 男性)。

色々なもの、人、事、言葉に優しさを(20代 女性)。

ESDの多面性と可能性を、広く一般市民にわかりやすく伝え、取り組みを促進していただければと思います(40代 女性)。

産官学、日本の丸一学となって社会システム(インフラ)を再構築すること(30代 男性)。

激動の世界、大変なパラダイムシフトが起きており、また石油ピークや食料、資源争奪戦が迫っている中で、地球全体、日本を考えるとという視点でお願いしたいと思います。大きな流れの本質を見ることが何よりも大事なことだと思います(60歳以上 男性)。

「ESD」に関わる活動はかなり活発になってきている。ただ、参加者の広がりが今後の課題と思う(60歳以上 男性)。

ESDは皆を幸せにできる考え方を、力を持っているので、この言葉をもっと多くの人に知ってもらいたいことです(19歳以下 女性)。

自分たちのまちに誇りを持ち、主体的に行動ができる人材の育成(20代 男性)。

日本でまだまだ知られていないので、自分も他の人に伝えていかなければと思っています(30代 男性)。

ESDで地域活性化を……(30代 男性)。

参加していただいた皆様、

長い時間、本当にありがとうございました。



講演会を終えて

今回の「地元学から学ぶ」講演会には、13時から19時までの長時間にもかかわらず、地元学の巨匠3名が一同に集うということもあり、多くの参加者が集まりました。

参加者の所属は、大学生・会社員・自治体職員・NPO・研究者等、様々であり、参加理由も、すでに地元学を知っている人・知らない人、これから地元就職しようとする人、すでに地元学を実践している人等、様々です。なぜ、こんなにも地元学が注目されるのでしょうか。

疲弊した地域

戦後の日本は、経済成長優先の開発を行ない、工業化や西欧化を推し

進め、自然破壊だけでなく地域の文化や社会、人々の生活様式や価値観を変えていきました。さらに、20世紀末以降急速に進展したグローバルゼーションは、国境を越えて、資本・人材・製品・文化等全てが自由に移動し、世界標準という均一化の下に地域や集団の独自性や多様性は軽視、あるいは無視されていきます。そして、このような変化にさらされた地域は、概して「遅れた地域」とみなされるだけでなく、世界標準を求めて「遅れた地域」を村人自らが捨ててしまうことにもなります。

兵庫県の僻地の学校での教育実践を記録した東井義雄(1)は、「村を捨てる学力」を率先してきた学校教育を非難し、生活の中で学んでいく学習が子どもたちによって表現され、認識されて始めて「学力」となりう

るとし、つまるところ「村を育てる学力」は、子どもを村にしばらくつけておくための学力ではなく、子どもに、生きがいを与える「地元を育てる学び」になるのではないのでしょうか。

地元学は、自分の足元である地元を見つめ直すことで、地元の人々に生きる力を与える「地元を育てる学び」になるのではないのでしょうか。

「地元学」研究

これまで、持続可能な開発のための教育(以下ESD)研究において、地域づくりにおけるESDの可能性として、阿部治・小栗有子・大島順子が、地元学に触れています(2)。さらに、日本社会教育学会では、2005年度から3年間をかけて取り組んできたプロジェクト研究「グローバル時代における(ローカルな

知)の可能性―もうひとつの生涯学習を求めて―」で、廣瀬隆人が地域学・地元学研究を展開しています(3)。

地域学と地元学の違いを廣瀬は、「『地域学』は、地名等に『学』を付した名称を用いて行う活動であり、『地元学』は、地元学と自称する活動を指す。『地域学』は、他と区別された一定の領域・空間を示す『地名』に『学』を付した『山形学』『薩摩学』『阿波学』『東北学』のような活動の総称として用いられる。『地元学』は、地域学に比べて、対象とする領域がより日常生活に特化した『地元』に焦点が当てられる」としています。そして、地域学も地元学も、1980年代後半〜1990年代初頭のバブル景気に伴う地域開発ブームから、バブル崩壊による地方財政の圧迫により地域が疲弊し、「何

もないまち」意識だけが残った現状に対する地域住民の抵抗として始まったとされています。

さらに、地名+「学」・地域学・地元学のいずれかを自称する135の「団体・組織」や「事業」の事例を分析し、概ね、①共有された定義や要件をもっていない、②地域住民による組織的な活動を展開している、③調査研究を軸に活動が展開されている、④学習活動のしくみを多様性を持っている、⑤グローバルゼーションとの関係の中で成立している、ということを明らかにしています。

これらを踏まえ廣瀬は、地域学(ここでは地域学・地元学を一括)の特徴は、「①自らの調査研究や学びを通じてその地に生きることのゆるぎない肯定感を獲得すること、②肯定感を獲得した上で、地域の課題や現実を学び、

地域に暮らし、生きる『自分とは何か』を批判的にふりかえること、③地域の課題と自分の生活を問直すことによって、自分が地域で生きる意味を問う直し、地域を変えていく主体となること」としています。

地元学から何を学ぶのか

今回の講師、結城登美雄氏、河野和義氏、吉本哲郎氏、この3名から私たちは何を学ぶのでしょうか。

①結城登美雄氏

東北の農山村で活動している結城氏は、地元の成り立ちや将来、そして地元に対する思いを、そこで生きるおじいさんやおばあさんとの何気ない会話から読み取っています。

コンビニもスーパーもない、都会の人にとっては不便で何もない村が、実

は、土地、住民、そして人の心がいか
に豊かであり、力が漲っているのかを、
私たちに教えてくれます。

村で生きるのは、決して楽ではない
でしょう。与えられた自然立地を活か
しながら暮らすしかありません。雨、風
雪、日照り、自然と共にある暮らしの
中で、苦しみもあれば、喜びもあります。
しかし、そこには村でいかに生きるか
の知恵が詰まっています。だからこそ、
コンビニやスーパーがなくても、問題
ないのです。

現代社会は、いじめ、不登校、ニ
ト、少年犯罪の増加など、大人が生み
出した不条理の下で生きがいを見出せ
ない子どもや青年たち、そして、その
ような社会を生み出した大人でさえ、
ストレス、過労死、リストラ、老後問題、
子どもへの虐待など、様々な問題を抱
え、生きがいを見出せないまま、日々

を過ごしています。

自分たちを生かしてくれるのは、足
元である地元であると気づき、その
地元を誇りを持っている人が、今ど
れだけいるのでしょうか。子どもや
大人が、自分たちの住む地域や社会
でどう生きていくのかが、今まさに
問われているといえます。

結城氏の挙げる良い地域の7つの条
件、①良い仕事の間があること、②良
い居住環境があること、③良い文化が
あること、④良い学びの間があること、
⑤良い仲間がいること、⑥良い自然風
土があること、⑦良い行政があること、
この一つひとつを作り上げていく学び
に、地元学があるのかもしれない。

② 河野和義氏

醤油作り、自根キュウリ、和太鼓
フェスティバル、水俣の話など、多岐

物かどうかもわからなくなっています。
河野氏が貫く「本物志向」とは、
食や農業を通して、現代社会を見る
目を養うことであり、本来あるべき
自然や人間関係の構築を目指してい
るのではないのでしょうか。

③ 吉本哲郎氏

吉本氏は、「地元学」の定義をあえて
ここでは語らず(4)、水俣病患者の杉本
栄子・杉本雄さん家族と出会い、そし
て水俣の再生を通して学んだことを
語ってくれました。

水俣病は、海の生態系破壊だけで
なく、人体への健康被害をもたらした
最悪の公害です。しかし、それだ
けではなく、人々との繋がりが地域
社会の崩壊をもたらし、偏見や差別
により人が人として生きる権利を剥
奪された、人権問題でもあります。

このような水俣病を「水俣病も天
からの授かりもの」として受け止め
た杉本栄子さん家族、そこには、受
難に立ち向かいながらも、復活に向
かう生きる姿を見たとき、吉本氏は語
ります。水俣の再生が、水俣で生き
るための希望を作ることにも繋がっ
ていたからです。これは、地元学に
似ていると吉本氏も語った、ブラジ
ルの教育学者パウロ・フレイレ(5)
の実践に通じるものがあります。

フレイレは、ブラジルや亡命先の
チリで識字教育・民衆教育を行いまし
た。その実践は、対話や集団討論を通
して、学習者が自ら置かれている状
況を批判的に読み取り、その状
況を克服し、人間として生きようとし
る自己解放と同時にその世界を変え
ていく力をつけていくものでありま
す。そして、その学びは、学習者が生

に渡る話の流れには、「本物とは何か」
を、河野氏が常に問いかけている姿勢
が伺えます。そして、「当たり前を当
り前と思う」気づきや価値観の転換を、
私たちに投げかけているのではないで
しょうか。それは、河野氏自身が、①
生みの豊かさ、②まともな3000円
の醤油、③折ってもまたくつく本物
のキュウリや水に浮かぶトマト、④祭
りは観光客ではなく地元が主役、⑤長
髪の若者との出会い、⑥裏方の駐車場
案内係の存在、など様々な出会いや気
付きを通して、価値観の転換を体験し
ているからです。

戦後の高度経済成長、そしてグロー
バリゼーションを通して、私たちの価
値観は大きく変わっていきました。そ
の最たる場所が、都会であり、本物の
変わりに偽物が蔓延し、本物の自然や
人間関係に出会うことのないまま、偽

きる地域や社会、あるいは文化や歴史
に基づいて、行わなければなりません。

フレイレは「言葉」を使って、「民衆
自身による民衆の言葉の開発、教育者
の言葉を権威主義的に、セクト的に撒
き散らすのではなく、人びとの現実から
出発して、人びとの現実に戻って
いく言葉、新しい世界を予見し構想する
言語を獲得し、発展させること。ここに
民衆教育の一つの中心問題があるのだ」
(6)といっています。この「言葉」を「知」に
置き換えたとき、地元学はその「知」を
育む教育になるのではないのでしょうか。

おわりに

既に述べたように、地域づくり
におけるESDの可能性として、阿部・
小栗・大島が地元学に触れています。
地域づくり(社会教育)における
ESDとして、阿部(7)は、水俣市

の地元学における取り組みを挙げ、環境・経済・社会・文化を総合的に捉えた、住民主体の学びを持続可能な地域づくりとし、典型的な地域におけるESD実践であるとしています。

現在、既存の教育や社会が、持続可能性を目指して変わろうとしています。それは、認識しているか否かに限らず、持続可能性という共通目標に向かって、様々な人たちが、様々な場で行っている学びのことであり、これらを総称してESDとしているのです。

このように考えると、限界集落といわれている日本の農山漁村が、何百年にも渡り持続してきた理由はどこにあるのか、そのヒントが地元学にあるのならば、今後のESDにも大きな示唆を与えてくれるのではないのでしょうか。

注

(1) 東井義雄『村を育てる学力』明治図書、1966。

(2) 阿部治他『持続可能な「地域づくり」「人づくり」に向けて―「国連・持続可能な開発のための教育(ESD)」の10年』の総合的研究中間報告「農村文化運動」No. 182、農文協、2006。

(3) 廣瀬隆人『ローカルな知としての地域学』日本の社会教育第52集、日本社会教育学会、2008年、39～49頁。

(4) 吉本哲郎『風に聞け、土に聞け』【風と土の地元学】農文協『地域から変わる日本 地元学とは何か』現代農業5月増刊号(52号)、2001年、190～255頁、で地元学の定義を述べている。

(5) フレイレの代表作として、パウロ・フレイレ／小沢有作・楠原

彰・柿沼秀雄・伊藤周訳『被抑圧者の教育学』亜紀書房、1979年、がある。

(6) パウロ・フレイレ／里美実訳『パウロ・フレイレ 希望の教育学』太郎次郎社、2001年、52頁。

(7) 阿部治『持続可能な開発のための教育(ESD)の現状と課題』『環境教育』19(2)、2009、21～30頁。

(文責：櫃本真美代／立教大学ESD研究センター／プログラム・コーディネーター)

『地元学から学ぶ』講演会記録集

発行日 2010年3月

発行人 阿部治（立教大学ESD研究センターセンター長）

発行所 〒171-8501

東京都豊島区西池袋3-34-1

ミッチェル館別棟1階 ESD研究センター

TEL / FAX : 03-3985-2686

編集・印刷 株式会社インセクト
